

平成 15 年 11 月 16 日

於・鴨川市役所 7 階会議室

第 1 回 鴨川沿岸 海岸づくり会議

議 事 録

	目 次	ページ
1. 開 会	1
2. 挨 拶	1
3. 参加者紹介	4
4. 鴨川沿岸の変遷について	5
5. 意見交換	4 6
6. その他	6 0
7. 閉 会	6 1

1. 開 会

○司会(佐久間) 皆さん、こんにちは。私、本日の司会を務めさせていただきます鴨川市都市建設課の佐久間と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、定刻となりましたので、「第1回海岸づくり会議」を始めさせていただきますと存じます。

2. 挨拶

○司会 まず初めに、会議に先立ちまして、本多市長より皆様方に御挨拶をさせていただきます。(拍手)

○本多鴨川市長 どうも皆さん、こんにちは、紹介いただきました市長の本多でございます。

本日はお休みのところ、いろいろと御予定があったでございましょう。そしてまた御多用の中、このように大勢の皆様方のお集まりをいただきまして、盛會に海岸づくり会議が開催をされましたことを大変うれしく思っております。本当にありがとうございます。

海岸づくりの会議の開催に当たりまして、一言御挨拶を申し述べさせていただきます。

御案内のように、当鴨川市、さまざまな資源に恵まれておるところでございますけれども、特に漁業と農業、観光等と、それぞれバランスのとれた町として発展をいたしておるところでもございまして、今や通年滞在型のリゾート地域が形成されつつございまして、県内外からも多くの方々にお越しをいただいております。

特に、鴨川の海岸、中でも「日本の渚百選」にも選定されております前原海岸、白砂青松の景勝の地でもございます東条海岸は漁業、観光、レジャーの中核といたしまして、また市民の皆さんの憩いの場所として、大変重要な場所でもございます。

しかしながら、最近では御案内のように世界的にも海岸の侵食が多く発生をいたしております。特に日本列島におきましても、台風時期になりますと海岸護岸の背後まで波が打ち上がり、海岸そのものが壊れるなどさまざまな問題が発生をするようになりまして、

当鴨川市の前原海岸においても例外ではないわけでありまして。自然美に富んだ房総の観光拠点として今後も発展をさせてまいりますためには、海岸はなくてはならない存在でございますので、これを将来にわたり受け継いでいく必要がございます。

そのために、御参加をいただきました皆様方にも御協力を賜りながら、より多くの方々のお知恵をおかりしながら、よりよい海岸にするための議論を進めていきたいと思っております。ぜひ忌憚のない御発言を賜りますよう、お願いをいたす次第であります。

なお、本日は大変お忙しい中、海岸の専門家でもございまして、海岸問題に大変造詣の深い宇多高明先生、清野聡子先生にもお出ましをいただいております。この後、先生方にはこの海岸の変貌について御説明をお願いしてございますけれども、日ごろ近く身近で海岸に接しておられる会場の皆さん方からも、感じておられる疑問などにもお答えをいただけるかと思っております。

今後もこのような機会を幾度か設けることによりまして、皆様方の御意見を可能な限り反映させた整備での取り組みを千葉県等、関係機関に対し働きかけてまいりたいと考えておりますので、皆様方の積極的な御意見を期待いたし、開会に当たりましての挨拶にかえさせていただきます。

本日はまことにありがとうございます。よろしくお願いを申し上げます。

ありがとうございました。(拍手)

○司会 続きまして、私の方から本日の進め方などについて御説明をさせていただきますと存じます。

初めに、この会議の趣旨を簡単に御説明をさせていただきます。

私たちが通称「前原海岸」、「東条海岸」と呼んでおります鴨川の沿岸は豊かな砂浜を中心に漁業、観光、レジャーだけでなく、日常生活の場として、私たちの生活に深く関わっております。しかし、近年、台風に伴う大波が海岸の背後まで浸水し、海岸の護岸が壊れるなど被害がございました。また、一部の区域では海岸線が後退するなどさまざまな問題が発生しており、対応が求められておるところでございます。

さらに、鴨川の海岸は私たち市民だけでなく、県内外からも多くの人々が訪れる大変貴重な資源でございまして、鴨川市の今後の発展のためにも、きれいで安全で利用しやすい海岸として未来に残していく必要がございます。

そこで、様々な立場の方から御意見をお伺いしながら、皆様とともにこの海岸をどのようにしていくべきかを考えるために、この「海岸づくり」を開催することとなりました。

第1回目の今回は、まずこの鴨川の沿岸がどのように変わってきたかについて御紹介をしながら、皆様とともに今の海岸について御一緒に理解していきたいと考えております。ちなみに、現在の海岸の姿をごらんいただくために、きょうの午前中に現地で簡単な説明会を行いました。

さて、次にこの会議の参加者と、その役割について御説明をさせていただきたいと存じます。

この会議では、より多くの地域住民の方々や、海岸を利用されている方々から幅広い御意見を伺う必要がございますので、先日、配布された市の広報に御案内を掲載させていただいて、海岸に関係の深いと思われる方々にも参加を呼びかけております。また、この会議は皆様の意見の窓口でもございます市役所が主催しておりますので、さまざまな課題を解決するために、専門的な知識が必要となることがございます。そこで、今回、海岸の専門家の方々に御協力をお願い申し上げますので、後ほど改めて御紹介をさせていただく予定となっております。

さらに、鴨川の沿岸では幾つかの県の行政機関が漁港や海岸、保安林などの整備を行っておりますが、皆様の御意見などを事業に反映していただけるよう、本日、千葉県からは鴨川土木事務所、南部林業事務所、南部漁港事務所の皆様方にも御出席をいただいております。

なお、今回、会議の運営や資料づくり、技術的な検討など専門的な分野をサポートする役割として、コンサルタントに事務局をお願いしております。事務局の運営や技術検討に必要な費用は海岸を維持・管理する立場でございます千葉県の御協力をいただいております。

最後になりますが、この会議のルールなどについて御説明申し上げます。

まず、この会議では、いただいた御意見などを正しく理解するために、議事録を作成させていただきます。つきましては、参考のために、会議の模様を録音並びに録画させていただきますと存じます。

また、先ほど御説明いたしましたように、この会議は広く皆様の御意見を聞き、さまざまな情報を共有化することが必要でございますので、基本的には公開とさせていただきます。

次に、御発言いただく際の注意事項を申し述べさせていただきます。

まず、会議の趣旨から、できるだけ多くの方々から平等に御意見を伺いたいと存じます

ので、御発言は1回につき1件程度としてください。

なお、進行役より発言の依頼等があった場合は、この限りではございません。

また、御発言を希望される方は挙手で意思表示をいたしまして、進行役による指名を受けてから御発言をお願いいたします。その際、「前原地区在住の何々です」、あるいは「漁業をしている何々です」というように、お名前を申し出ていただければ助かります。

さらに、個人や機関に対する誹謗中傷や、本会の趣旨に無関係、または著しく反する発言は御遠慮願いたいと存じます。

なお、これらに反し、議事進行の妨げになると認められた場合は、主催者側の裁量により、それ以降の発言の制限、あるいは退場をお願いすることもございますので、御了承いただきたいと思います。

最後に、この部屋は大変狭いため、禁煙とさせていただきます。たばこを吸われる方は、申しわけございませんが、会議室外の通路に喫煙所を設けてございますので、そちらでよろしく願いたいと思います。

3. 参加者紹介

○司会 それでは、大変申し遅れましたが、本日、お越しいただいております専門家の先生方を御紹介させていただきますと存じます。

まず、宇多高明先生でございます。

○宇多アドバイザー 宇多です。よろしくお願いいたします。(拍手)

○司会 宇多先生におかれましては、現在、財団法人土木研究センター審議役、なぎさ総合研究室の室長でございます。

御経歴でございますが、昭和48年に現在の国土交通省国土技術政策総合研究所の前身でございます旧建設省土木研究所に入所され、同研究所の河川部長や研究総務官を歴任、昨年秋より同センターに着任をされております。全国はもとより、世界中の海岸を歩き回り、海岸の調査・研究を行うとともに、海岸事業などの計画、立案に関わってこられました。著書に「日本の海岸侵食」、「現場のための海岸工学」などがあり、日本の海岸工学の第一人者でございます。

また、近年では合意形成会議や講演会などに多数御出席をされておまして、よりよい海岸づくりを目指して、超多忙な活動をされており、千葉県におきましても、お隣の和田

町で行われました「白渚海岸を語る会」や九十九里浜の侵食対策へのアドバイスをいただ
いており、今回も御出席をお願いした次第でございます。

続きまして、清野聡子先生でございます。

○清野アドバイザー 清野でございます。どうも、こんにちは。(拍手)

○司会 清野先生におかれましては、東京大学大学院総合文化研究科広域システム科学科
の助手をされております。御専門は海岸河川保全学、沿岸環境学、生物形態学などでござ
います。水産や生物にもお詳しく、著訳書には「イカの春秋」、「ペンギン百科」などが
ございます。

近年では、特に漁業者や地域住民、さらには生物などさまざまな立場から地域社会と公
共事業の関わり方について研究をされておまして、全国の住民会議や講演会にと、文字
通り東奔西走されております。

また千葉県においては、宇多先生とともに、「白渚海岸を語る会」では専門家として御参
加をされたほか、海岸保全基本計画の委員、三番瀬の専門家会議の委員などを担当されて
おまして、今回も大変お忙しい中、御出席をお願いした次第でございます。

大変長くなりましたが、以上で会議の趣旨説明を終わらせていただきます。

それでは、ここからは司会進行をお2人の先生にお願い申し上げ、休憩を取りつつ、概
ね4時ごろまでの間、会議を進めていきたいと考えております。

それでは、お2人の先生方、よろしくお願いいたします。

4. 鴨川沿岸の変遷について

○宇多アドバイザー ただいま御紹介いただきました宇多です。

ちょっと私の立場、先ほど「先生」というふうに呼んでいましたけれども、正確に、き
ょうは全く嘘のない話をしたいものですから、最初から間違えたいけないので、私は「先
生」ではございません。土木研究センターという財団法人に勤めている一介の技術者です。

今回の行事をするにはいろいろな計算をやったり、事務的にいろいろやったり、こう
いうセッティングをしたりするのにお金が必要になりますので、先ほど事務局が言ってお
られるように、県土木の方から受託して私はここへ来ています。受託したから、県土木の
肩を持つとか、そういうふうな立場で話をするつもりはありません。もしあったら、直ち
に指摘していただければ、それに正當に答える準備はできています。

ただ、はなからそういう喧嘩腰ではなくて、きょうはとにかくこの鴨川の海というのは
非常に貴重で、かけがえのないものだと言った市長さんと言われておられましたけれども、そ
うい
うものだとお話を皆様にもどうもわかっていただきたいので、その中でいろいろな
方が生活なさっているの、だれかをつぶして、だれかが伸びるということではなくて、
共生というか、この地域の皆さんがうまくいこうな、そういうふうにするにはなかなか
皆さんで十分議論を尽くさないといけないということになると思うのです、海岸の話は。
その辺をきちっとお話をしたい。だから、だれかの肩を持つということは、私は一切した
くない。

したがって、きょうで話は終わるわけではございませんが、決して押しつけはいたしま
せん。こういう案をやれとか、こういう案を県土木に言えとか、そういうことを言う立場
には全くないということをお話したい。私がここに立っていること自体も資本主
義社会ではお金がかかるものですから、県の方からお金をいただいた。それは一切うさん
臭いことはございませんので、その辺は御理解をお願いします。

[Power Point]

まず最初に、「鴨川沿岸の現状について」というスライドでお話をしたいと思います。

こちら側、隣の方に最近の写真と並べておりますが、どうせ後で写真を出しますが、幾
つかの言葉を、大事な場所がありますので、覚えていただきたい。この辺から向こうを見
ると、漁港の前に弁天島という大きな島があります。それから、前原横渚海岸、「渚」とい
うのは砂浜という意味で、「すか」、「すな」というのは同じ発音ですから、砂浜があったと
いう意味なのですが、その海岸。それから、東条・広場東海岸、それから浜茨というのは
ずっとこちら側の、小湊寄りの方の海岸、そういう全体のところについての、今わかって
いることのお話をしたいと思います。

[Power Point]

先ほど押しつけは一切したくないと申し上げましたけれども、何が起こったかという、
これは事実だけ正確にお伝え申し上げる必要があるの、このところでは海岸の中央部、
さっき午前中に行った、11時ぐらいに見ていたシーワールドの前ないしは右側のあたりで
非常にすごい、後ほどごらんに入れますけれども、越波の災害が発生している。災害と言
うとわかりにくいかもしれない。要するに、大波が飛び込んで来て、旅館のレストランの
ところが水浸しになるというようなことが過去に繰り返されています。まずそれが、わか
りにくいかもしれませんが、越波災害が起こってしまった。

その起こった場所のひどいところはシーワールドとか、その隣にシーワールドホテルと
いいしまたか、白い 7 階建てぐらいのホテル、あの辺は波が非常にきつく上がるようにな
ってしまいました。その目の前に護岸があるのですが、あそこは朝方、犬を連れて散歩なさる
人がたくさんいるところなのですが、あそこに大穴があきまして、全く通れなくなってい
ました。浜辺に下りられないどころか、要するに海岸に行きようがないという状態が起こ
ってまして、これは平成 9 年ぐらいから何遍も繰り返されてきましたけれども、きょう
は、これは県土木というところが災害復旧、要するに波で壊れてしまったから元通り直そ
うという工事を本日現在やっていました。

それで間もなくでき上がるのですが、それは後ほどお話をしますけれども、元通り直す
ということで国の予算が出てきますので、根本的にそこをもっとよくするというふうには
なかなかできにくい。だから、今現在は昔と同じような構造物をつくっているのですが、
1 つの問題点として、長期的に見て、それだとまた波をかぶって壊れるという危険性があ
る。

それから、これと裏腹の関係なのですが、前原海岸で、待崎川という河口があるのです
が、あのあたりで汀線が後退して、それからもっと南側のフィッシャリーナの方では、今
度は逆に大量の砂がたまってしまふ。フィッシャリーナの入口の方のところに砂がたま
りますと、船の出入りに邪魔になりますので、障害物になる。東の方は砂が欲しいですが、
隣りは砂が沢山たまってしまふという事態が発生している。その全体のからくりについて
お話をしたいと思います。

[Power Point]

それで、これはいろいろな問題があるわけです。それぞれのきょう聞いておられる方の
主人はだれかというのは皆さんです。私はただ単に説明をする技術者として来ていますの
で、ああしろ、こうしろと言うつもりは全くありません。ただ、議論をしと言われても、
何が何だかわからなければ、議論のしようがない。それで、なぜ越波、どうして波が越
えてしまうのだろうかとか、なぜ侵食が起こってしまうのだろうか。このあたりはここに「専
門家」と書いていますけれども、ここにいるような人たち、我々はこの間に利害を持ち合
わせていないのだけれども、一応そういうことをたびたびやっていますので、見せてい
ただければ、何が問題かというのはわかる。そういうところで、この矢印のこういうと
ころの分析に多少の理解の促進になる。

それからその次、今の状態だけ見ていると話がおかしくなってしまうわけで、つまり今

見ている姿というのは昔からあったわけではなくて、どんどん変わってきていますので、
50 年前の鴨川はどうか、20 年前はどうか、それこそ去年はどうだったのかという長いス
パンで見えていかないと、ここにおられる方も来年の鴨川がよくなることを目的としている
のではなくて、市長さんがさっき言っておられたように、発展は長いスパンで見えていく
わけですね。10 年、50 年たってもいい鴨川で、非常に多くの人に何遍も来ていただける、
そういう市になるということからすると、海岸も同じで、過去の履歴を全部明らかにして、
何でそうやっていったかという背景をきちんと明らかにしたい。

それから、海岸の環境利用というのもこれは大事で、これは法律に今、防護と環境と利
用はちゃんと調和させろということが書いてあるのですが、きれいな事で言うつもりはない
のです。環境に、地球にやさしい云々という、よく巷に氾濫しているあの手の言葉を幾ら
言ったところで問題は解決するのではなくて、実際は防護と環境を両立させようと思うと
苦しみに遭う。利用と防護も同様、それから利用と環境も本当に成立させようと思うと、
どちらかがどちらかを超越するなら別ですけども、同等に考えるとすると、かなり苦し
い作業をしなければならない。本当の意味の両立はできないことがほとんどですね、これ
は。今までの経験では。

ですが、それは苦しいから議論しないというのではなくて、なぜ苦しいのかというのを
皆さんに御披露して、その中で何とかギリギリの、よい意味の妥協ですね。変な妥協では
なくて、よい意味の折り合い付け、我慢するところはあってもいいではないかという、そ
ういうことについて、これは、実は私たちはこの地について余りなじみがない。何度も来
ていますが、こここのところ皆さんからのお話を伺いたいです。皆さんのところ
の持っている、これはおばあちゃんの撮った写真だというようなものがあるかもしれませ
ん。そういうものが非常に生きてきますので、そういうものの提供をぜひ皆さんからして
いただいて、傍観するのではなくて、自分たちみずから参加して、自分たちの海をよくし
たいという、そういうふうにご検討いただくと大変助かるのですけれども。

それから、どうしよう、これは「望ましい海岸の姿」というのはありますけれども、「望
ましい」というのは人それぞれで、サーフィンをやっている人はいい波が崩れる、波があ
るのはサーフィンに望ましい、漁師の人たちは、安全で、イワシが山ほど捕れる、そうい
うものが捕れるというのが望ましい、人それぞれですね。それぞれ大事だと思うのです。
それぞれ大事なのだけれども、こここのところの本当の調和をしようと思うと、さっき言
ったトレードオフの関係が出てきますので、それについてきちんと認識した上で、どうしよ

うという話を持っていくべきだ。

それから、事は簡単ではないのは、お金がかかってしまうのです、何かしようと思うと、やはりそれも、後ほど質問していただければ、すべてどういう仕組みでお金が流れるかということについても全部お話をしますので、なかなかルールというのか、そこら辺も考えた上でないと、やればいいではないかと言っても、法律があって、その法律のもとにいろいろな仕組みがありますので、その中でどういうふうになっているかということあたりもまた御説明しないと理解できないと思うので、その辺については、こういうところの行政とか、私ども専門家がいますので、いろいろなお話を、情報を提供させていただきたい。それで、大事なのは、これで物をつくって予算を消化して、何とかということ、はなからそういうつもりではございませんので、本当に納得できるいいものになるのかという、単純で素朴な質問について、ちゃんと考えたい。だから、こういう案はくだらないから棄却してしまえと、そういうことはなしに、もっと別に案があるのではないかということもそれはあるでしょう。それを白日のもとで議論をしたいというのが今回の趣旨です。

だから、早く、2 回目に上げないと予算を流してしまうから大変だぞと、よくそういう説得工作みたいな会議がございませうけれども、私たちはそういうつもりは毛頭ないです。予算を使うためにあるのではなくて、目的はこのところで、今後、長い年月にわたって鴨川のいい海を皆さんの力で何とか守り続けていく、そのためのコンセンサスをつくり上げるということ、だから何も護岸をつくっておしまいとかというのではなくて、鴨川を一体どうしようという、もっと 50 年ぐらい続くようなものの初めをこのところで一歩を記せたらと。

それで、先ほど「御主人は」と言ったら、ここに座っている皆さんですね。それで、私たちはただ単にお助けマンで来ているので、ああしろ、こうしろと言うつもりはありません。ただし、技術的にできないことをやると言ったら、それは間違っているというふうに、ちゃんと的確に言うつもりです。

[Power Point]

それで、これはさっき午前中、こういうふうにして、これはフィッシャリーナの防波堤の上に上りまして、いかにフィッシャリーナの漁港のところの管理している人が大変で、目には見えねどもいろいろやっているのですよ。反射波の防止とかいろいろやって、フィッシャリーナの沖に防波堤があって、それをつくって消波ブロックを入れないと、50 トンのブロックが入っていますけれども、本港から出てくる船がこうなってしまうよ、などと

いう話を一生懸命先ほどさせてもらいました。

それから、その下は、ついそこのところですね。シーワールドの隣のところでちょっとお話をした。こういう実地を見ていただいて、頭にイメージがわくようなところで話をしていくべきではないかなと私たちは考えて、一応こんなことを今朝やったわけです。

[Power Point]

それで、ちょっとなじみがないかもしれませんが、後ろの方、見えますか。こういう空中写真というのがあります。これは何かというと、ことしの 1 月 4 日にこの上空を飛行機が飛んでいます。ここにちょっと書いてございますね。京葉測量株式会社というのが、これは頼んだわけではなくて、千葉県は県土を毎年 1 回、必ず飛んでいます。これはお金を出すと、1 枚 3,800 円でどなたでも買えます。それを買ってきて、コンピュータに入れたのがこれです。この写真で全体像がわかります。これは皆さんの自宅、大邸宅に住んでおられれば見えるのだけれども、でも、大きな施設はみんな見えてしまいますね。

こうやって見ると、例えばシーワールドが全体の海岸のどの辺にいるかとか、その前に砂浜があるのか、ないのかというのは、これを見たら一目瞭然なので、こういうものを我々は多用しています。それで、こちらが天津小湊町の方で、ここのところに境界線がある。

ここから東側と言うべきでしょうか、ここは全部岩礁になっていますね、もちろん。それでここから砂浜が始まって、東条海岸が始まって、この角のところまで 3.8 km ここにありませうけれども、それで私のこのポケット、ポケットというのは一たんお金を入れると外へ落ちないですね。それと同じように、この中に入ってしまった砂は外へ行かない。それをポケットビーチといいまして、私のポケットにちなんでつけられています。

そのポケットビーチ、この中にある砂は逃げていかないのです、基本的には。取ってしまう、砂利屋さんが取って持って行ってしまおうとか、皆さんが盆栽づくりにこの砂を取って持って行ってしまおう。それをやれば消えますけれども、基本的にここからここまでにある砂の量は変わりません。もう少し正確に言うと、この加茂川が南端に流れ込んでいますが、この砂浜をつくった本当の元は、この加茂川が山の方を少しずつ崩しながら持ってきたものです。でも、非常に長い年月をかけてつくっていますので、きのう、きょうこれができたとかいう話ではない。

さあ、それで名前をちょっと覚えておいていただきたいのですが、これは浜茨漁港という、左手側に漁港がございませう。この前に細い道がありまして、ときどき南風が吹くとここのところで、歩道がバサッと落ちたのがここらあたりです。それから、東条海岸

という砂浜が始まる。

ずっと見てもらうと、ここのところに海岸線に沿って白く浮き出ているのが国道128号線というものです。

それから、加茂川は、ここのところに鴨川漁港というのがありますが、漁港のすぐそばに入っていますね。魚見塚展望台がこの先の方ですから、あそこから見ると鴨川の漁港の方へ川が流れて、この市庁舎の裏側を流れている川がこっちへ寄っているのはなぜかという、ここのところに弁天島と岩礁があるものですから、川の流れは波の静かなところ、静かなところを目指して流れてきますので、これはもっと真っすぐ行ってちょうだいと言っても、実はどんどん、どんどんこの陰の方、陰の方へと回り込んで、この位置に固定されることになりました。これは、これ以上向こう側は岩礁があるので、それ以上行かれなかった。そういうわけで、この加茂川がここに流れ込んでいます。

それから、皆さん、海を見ると真っ青で何も境界線がないように思うかもしれませんが、そうではなくて、ここのところには鴨川漁港という、これは県の水産部局の管理している漁港がございます。ここのところに線を引いてあるのは何かと言うと、これは海面上には別に旗が立っているわけではございません。でも、ここの中の工事はすべてこの漁港管理者が行うという線です。だから、この中でブロックを並べるとか、防波堤をつくるとか、それらの行為はすべてこの漁港管理者、正確に言うと、南部漁港事務所がやっている。これはここにたくさんの漁師、何百人といますので、その人たちがここでイワシを捕りに行くとか、サバを捕りに行くというときに、安全に出ていくための工事を当然しておる。こんなところに防波堤があるのも、ここが横波を食らうのでつくったわけです。そういうふうにして、この中でその南部漁港事務所が管理しておる。

皆さんは海に行くと線は見えないかもしれませんが、フィッシャリーナがここにありませんね。今朝、最初に行ったところ、駐車場があったのがここです。あのところからこっち側は海岸保全区域といいまして、これは県の土木事務所、鴨川土木事務所が具体的には管理しています。同じ県です。県知事さんは1人ですね。それぞれこの中には南部漁港事務所、ここは鴨川土木事務所、ここはまた漁港事務所というふうにして、手分けをして仕事をしています。この線は見えないですけども、そういう具合になっている。

したがって、この中のここにボコンとお山ができていますけれども、これは今朝ほど説明したように、離岸堤があるために背後が静かになって砂がたまっておるということで、離岸堤を並べたのは県の土木事務所、なぜ並べたかという、前原海岸のところのこの砂

浜が消えて越波が、波が越えるようになってしまったので、大分前に、20年ばかり前でしようか、ここに離岸堤を2基半を並べて、その後、砂がたまっただけが現在の状態。

それで、以後、これから説明しますが、ここの鴨川漁港のこの防波堤とフィッシャリーナの防波堤を延ばすのは、さっき言ったように、漁師の人たちが安全に航行できる。しかも、船をとめるだけではないでしょうがないですね。魚を陸に揚げて、運送屋さんが来て競りに持っていかれるという設備も必要になるので、そういうものも付帯設備としてつくるスペースが必要。そうやってつくったのですけれども、ここのところの防波堤が沖に突き出ることによって、波が静かになる。そうすると、さっき現地で御説明したように、そのことを意図したわけではないのだけれども、結果としてここのところに、こちら側は波が静かになるので、砂がたまってくる。そして全体の砂の量は一定ですから、どこから来たかといったら、別に九十九里浜から泳いできたわけではなくて、この隣のところからこちら側へ来る。これは全国に何百箇所という事例がございます、科学的にはすべて完全に説明できます。

ただし、意図してやったわけではないというのはよく理解してほしいのです。意図して、わざと砂をためてやろうと、オンパースというか、そういうことではなく、結果として砂がたまっただけ。砂がたまったときに、シーワールドの前は砂が取られてしまった。それをもって波が越えるようになってしまった、基本的な隠された問題がここにあるわけです。

[Power Point]

それで、この中をもう少し拡大してみるとこんな具合で、きょうなどはサーファーの諸君がこのポイントというか、サーフィンをやるものすごくいい波が立つところ、ここからこうきょうは来ていますので、ここのところで、ざっと見ただけで200人ぐらいいたでしょう、やっていたけれども、きょうは南うねりなので、非常にいい場所であるわけです。

実は、その裏側に大量の砂がたまっていますけれども、これはもとからこうではなくて、これのかなりの量の砂は待崎川を越えて北側から流れてきたものだ。では、これを取ってこっちへ置いたらどうか。後ほど対応としてそういう質問が出るかもしれませんが、これはすぐに戻るといふ、そういう仕組みが内在的にあります。

ここの位置関係からすると、ここが最初に私たちが上った、ここから下りて、こう行って、こう行って、ここのところが拡声器で御説明したところで、次は飛ばして、次はここへ入ってきたわけです。ここがほとんど黒っぽく見えていて、白く見えているのは護岸で

すけれども、ほとんどくつついて見えますね。これが諸悪の根元というか、砂浜がないために前面が深く、波がドシャツと来る、そういうことをこの空中写真はあらわしています。

[Power Point]

それで、ちょっと頭を冷静に持っていきたいのですけれども、今お話をしたのは、このところ 10 年そこの話なのですが、実はこの房総というのは繰り返、繰り返、地震のたびに隆起しています。御存じのように、元禄地震のときには、1703 年というのがあったのですけれども、また最近地震が来るとかいう予測というか、言っている方もおられますが、そのときは 2m 隆起した。関東大地震、1923 年、これのときは 80 cm ばかりボンと上がっている。大体 2~3 分でパツと上がるわけで、そのたびにこの台地が上へ上がっていく。そういう土地柄にあるということ、それはまず理解してほしい。これは我々が生きていく時代に来るのか来ないのかは知りません。ただ、そうやってできた場所である。それから、この鴨川の町というのは細く、縦に V 字状に入っていますが、実はここにきれいな断層線が走ってしまっていて、この浜荻側とこちらでは違う、地質構造が全然違う。それなのできれいに、この写真でいうと、ここに何となく線が見えますね。こっちと向こうではそういうふうが違うという特性がある。そういう土地であるわけです。

[Power Point]

さあ、これからぜひ皆さんの協力をお願いしたいのですけれども、空中写真の古いものをごらんに入れます。今後、皆さんのところに手持ちの、自分が小さいころの写真か何かがあれば、こういうものと重ねていくと非常にいいと思うのですが、これはお手元にも配布していると思います。ちょっと小さくて済みませんね。これが昭和 22 年の空中写真です。私は昭和 24 年に生まれていますので、今現在、54 歳です。ですから、約半世紀前の姿ですね。この当時は、これは米軍が撮った写真なのですが、ここからここまでが 4 km だから、この白く帯状に見えるところは砂浜です。それで、この黒くポツポツとあるのが松林、このころですよ、おじいちゃんが汀線、渚線に行くのに足の裏が熱くて歩けなかった。あの過去の記憶はこの時代のことを、この時代がしばらく続きましたので、その後、15~16 年は続きましたので、そのときの記憶をおじいちゃんをよくしゃべるわけです。あれはおじいちゃんが小さかったから、浜辺が狭かったのに熱かったというふうな皮肉っぽい言い方もできますが、でも、当時の空中写真を調べてみると、確かに広がったという事例が非常に多くあります。

このころは、これは風が吹くと砂が内陸の方へ飛んできますので、畑が埋まってしま。それから、道が砂で埋まる。それから、ここに待崎川がありますが、これは左を向いていますが、こんなところの河口が埋まってしま。そういうトラブルがたくさんあった時代です。幸いにして、この加茂川は漁港の角のいいところ、ここは岩礁が出ていますので、その固いところを流れていたのが問題はなかった。

サーファーの方がおられるかもしれませんが、このところに、こっちから来ているうねりがシューツと曲がっているのがよく見えますか。終戦直後における赤堤ポイントというのはこれのことですね。今はフィッシャリーナの下になってしまいましたけれども、波がギューツと回っているのはこの写真で非常によくわかるわけで、だから、別にサーフィンの肩を持つつもりはないですが、海は広いのだから、あっちでもやれ、こっちでもやれというふうになかなか言えないのは、こういう非常にきれいに波が屈折してくるところにそういう非常にいいポイントがあったというのは、やはりそのとおりだと思います。

これがもとの原風景で、このときは海岸線に道路が通っていません。ですから、住んでいる方は、ここに集落がありますけれども、こっちへグルツと回っていかなければならない。当然、車ないですよ、このころは。荷車をみんな引いているころ、ボンネットバスが一生懸命走るか走らないかという時代で、だから不便だったと思いますよ、これはすごく。

[Power Point]

それが 36 年前、昭和 42 年、1967 年になるとこういうことが起こってきました。さっき、広く見えていたところのほとんど中央を横切るようにして、128 号線が建設されました。これは松林の両方の真ん中を突っ切るようにしてつくられました。その前側にも黒く見えているのは、これは保安林といいまして、先ほど言った飛砂や塩分が飛ぶのを防止するための松を一生懸命植えてきたものです。これはこちらの、道路の海側まで植えられた。このときに注意していただきたいのは、きょう行った望洋荘跡というのはここですけれども、望洋荘は当時あったけれども、シーワールドのような各種施設は、道路より海側には何もなかったのです。私は善悪を言う立場ではないので、これはそうなっていたということで、その後こちら側の土地利用から、どうしても海側に施設がつくられることになっていった。鴨川グランドホテルは一部出ていましたけれども、そういう状態だったわけです。

でも、この当時でも砂浜の幅は 200~300m ですか、こっちの方は、逆に前原海岸の方は全然ない時代があって、これが昭和 42 年ですから、このころに前原海岸のここは集落

が非常に密集していますから、このところに波が越えてしまう、しぶきがすごいので、ここを守ってくださいという陳情が鴨川土木事務所の方になされて、市を經由したのだと思いますが、それで、それは大変だということで、ここに離岸堤が後々つくられることになっていったということだと思います。これが1967年、36年の昔。

[Power Point]

それで、約20年前になると、もう少し土地利用が進んできた。これはいろいろなことが同時に行われていたわけですが、まずは128号の海側の海岸線沿いの保安林のところに鴨川シーワールドの施設が横長につくられた。それから、この待崎川の河口もかなり整備が進んで、さっきこっちへ随分曲がっていましたが、そういうことがないように、河道の整正がなされた。

それから、この旧鴨川漁港の、ここが旧漁港で、ここからこう出てくるときに右斜め横から、胴に波を受けるので、それを防止するために防波堤がこういう形で延ばされた。延ばされ始めたという段階でしょうか。それで、こうなった。この段階ではまだこの施設も規模が小さいですから、海浜全体への影響は大したことはない。前原海岸は砂浜が全くない時期があったねというのが大体20年前。

[Power Point]

それが8年前、1995年、あの阪神大震災があった年です。写真のこちら側がないので、こちら側しかありませんでした。これを見ると、さっきつくっていた防波堤がこれですから、その前にちょこっとまた延ばされた。それから、このところにフィッシャリーナの施設がちょっとずつつくられ始めた。その当時はここは後ろが、浜辺は狭くて、離岸堤が3つ並んでいたという状態でした。それから、この段階でシーワールドの前の砂浜はすでに狭かった。これはフィッシャリーナができたから狭くなったというのではないのです。それはあべこべで、もともと浜辺がないところに用地上、シーワールドが横長につくられた。もともと狭かったのですが、それに加えてこのところがスッと浜辺が狭くなったのは、こちら側に砂が移動したからです。

それは作画的にやったわけではなくて、離岸堤もフィッシャリーナもそうなのですが、同じような施設で、波を静かにしてちょうだいということで離岸堤を、この当時はいろいろな施設の中で離岸堤というのはかなり使われていましたから、離岸堤を並べた。その結果、この人たちは「ありがとう」というふうに言われたわけです。ここはここでまた別の漁業の振興、それからプレジャーボートが川の中に不法に係留されていて、

これは本当に洪水が来たら大変だということで、そういうことを防止するためにつくっていったわけですが、その施設がつくられ始めた。結果としては、だけれども、砂は向こうへ行ってしまったということが起こったわけです。

[Power Point]

それで、これが1997年で、このときにかなり強い災害を受けたのが、災害というのはわかりにくいですが、波が飛び込んできて侵食がひどくなってしまったのは、このシーワールドの前面がずっとそうで、この白く直線的に見えるのは白い護岸でして、この範囲がガタガタになってしまったというのが起こったわけです。だから、この段階でこっちサイドはもう余り砂は要らない、来てほしくない。だけれども、来てしまう、こっち側。こっちは行ってほしくないのだけれども、行ってしまふ。そういうアンバランスな問題が起こりました。

ロイヤルホテルがどこかの辺で、ロイヤルホテルより北側は余り多く変化はございません。このところ、斜めに道路を下りてきて、下に駐車場がありますね。サーファーの人がこの辺にも随分いますが、あのあたりは余り変わっていないというのが現在の状況です。

[Power Point]

2003年、これはさっき説明したので、もういいですね。最も新しい写真によれば、こちらあたりがかなり侵食してしまったという状況にあります。

[Power Point]

ちょっと聞き疲れてしまうものですから、ここでちょっと、飲み物が何かありますか。
○事務局(高橋) それでは、ここで休憩をしばしとらせていただきたいと思います。
10分間やりたいと思いますので、今、手元の時計が15分ですので、25分まで休憩させていただきます。

[暫時休憩]

○事務局 それでは、引き続きまして、清野先生の方から発表の方をお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。
○清野アバイザ 東京大学の清野と申します。海岸の研究をしています。

さっき立場の話があったので申し上げます、私は業務ではなくて研究ということで、日本の海岸だとか、それから世界の海岸とかを調査する中で、同じ自然条件なのに隣とこの町でどう違うかというのは、住んでいる人の考え方で、どうしたいかなのだなというの

がありました。

私が育ったのは神奈川県の変子というところなのですが、そこもすごくいいビーチだったのだけれども、自分が育つ間にどんどんお客さんも減り、ビーチとしても余りよくなってきてしまったというのがあります。そういうことに興味を持っています。この会議に参加する中で、アドバイザーという立場なのですが、それはある程度私がそういうことで海岸の研究をしているとか、それがどういうふうに住組みとしてとか、あと自然の条件で人間によって変わるのかとか、それでどんな生物が棲んだりするかどうかということがあるので、そういう研究の立場からお話をしたいと思っています。

一方で、公共事業のことというのは結構大変で、今回は全体のお話をさせていただくのですが、あるときにはやはり何かに、地元の皆さんに判断していただいたり、考えていただくという時期が必ず来ます。そのときに、ある程度きちんとした考える時間をとっていただけるかどうかということで判断が、長い目で見て、みんながよかったなと思えていたり、ちょっとどうだったかなということがあるのです。

私、千葉県に関しては、海岸保全基本計画ということで、全体的な計画をつくるときに参画させていただいて、千葉県の本当にぐるりの海岸をどういうふう考えるかというのを手伝いさせていただきました。その中で多くの地元の方から、ものすごく大事なフレッシュなことを教えていただきました。それがどういうふうにフレッシュかという、海岸の計画というのは、立てるときは、大抵今までは波とかそういうもので立てていたのですが、生物だとか、そこに住む人の暮らしというようなことだと、例えばこういう古い写真をどなたかが会場へ持ってきてくれるとか、そういった資料が発見されるということで、計画の質が格段に上がるのです。そうじゃないと、情報がない海岸というのは、大体の波の方向とか地形でこの辺かなというので今まで決めるしかなかったのですが、こういう会議をやったりする中で、本当に計画の質も上がったりとか、選択肢が今まで1つしかなかったように思えたのが、幾つもあったりするようになりました。

私の専門としては、生態系と、それから人の暮らしみたいなところなのですが、それを過去の話と漠然と聞いていてもなかなかお話が出てきません。私も過去にここに住んでいたわけではないのですが、その中で古い写真が1枚あるだけで、多分そこにおられる方もいろいろお話をしたいこととかたくさんお持ちだと思うのですが、ここというのはこういうところだったのだというのがもうすごく外から来た、私みたいによそ者として来た人にも、そのときにいたみたいな気持ちになるぐらい、ああそうだったの

かと思うことが多いですね。

今から何枚か写真をちょっと見ていただきます。宝の持ち腐れといいますが、足下に結構重要な資料というものが眠っているもので、鴨川の古い写真はありますかということをお願いしたとき、まず空中写真はさっき言ったように出てきました。それだけではなくて、市役所の資料室にこういう古い、日焼けしてしまっている本があったのです。「写真集 明治・大正・昭和 鴨川 天津小湊」というので、この本のタイトルを聞いたことがある人はいますか。明治、大正、昭和の古い写真が掲載されているのです。今から回覧させていただきますけれども、これは国書刊行会という結構マニアックな本を出す会社があって、そこが郷土史といって、この地域でも教育委員会だとか、それから社会科の先生ですと地域の歴史を調べている先生がいらっしゃるんですね。その方たちに、全国の方にお声をかけて、写真を出してもらったのです。これが何とこの市役所の資料室に眠ってしまっていて、その中から写真を引っ張ってきました。

これは逆に言うと、海岸のことを考えたいときはもっともっと写真が欲しいのです。ただ、漠然と写真をくださいと言ってもどんなものかわからないと思うのと、それから、1枚の写真から多分話題が広がっていくというのを、きょう皆さんからいろいろお話が伺えれば、どんな写真が家にあるから持っていこうと思っていたらと思うので、ぜひこれから一緒にスクリーンを見ながら、逆に私が説明するよりも、皆さんの方からどんどんお話をいただくと助かります。

[Power Point]

これは明治 23 年ごろの風景ということで、説明には「磯村から加茂川・前原を望む」というふうになっています。これはずっと藁葺き屋根があって、これはちょっと写真が白く光ってしまっているのですが、ここがもうずっと砂浜だったというのがわかるかと思えます。

今、そこでちょっとお話をされていた方に、この写真についてコメントがあったらぜひお話を伺いたいのですが、どうですか。

○庄司 私もここに生まれてこの方、ずっと育ってきて、365 日、ずっと海を見つばなしでいるのですが、この海岸のころはまだ多分、河口の中に港があったと思うのです。それで、大謀網が、時化で 20 人ぐらい亡くなったときに初めて反対側に港が建設されたのではないかと記憶されているのですけれどもね。

○清野アドバイザー ありがとうございます。

今、漁業をやっているんですか。

○庄司 いえ、違います。実家は漁業ですけども。

○清野アドバイザー 本当にそういう点で、これから漁業の写真も出てくるんですけども、こういう写真というのは結構大事で、皆さんにお配りした資料で、空中写真だと、どこかの家がどれというのわからないんですよ。だけれども、これを見て、ああこれはあの家じゃないかなとか、鎮守の森じゃないかなというのを教えていただくとすごくわかるんです。だから、きょうお配りした空中写真と、それからこの絵のここはだれの家で、今で言うどこなのだというのをきょうの会場でもいいし、あとはずっと資料を置いておきますので、そういう話をいただくと、砂浜がどういふふうに変わってきたかとか、人のお家の建ち方がどう変わったのかというのがすごくわかります。

では、ざっと写真を見てください。

[Power Point]

これは昭和20年代の風景で、戦争が終わってすぐです。これも「魚見塚から加茂川・前原望む」ということで見下ろしたところなんですけども、そのときには、ここに立派な橋がかかっていたりとか、広い砂浜があったりとか、それでお家の感じもまた随分と明治時代とは変わっていますね。

そのときに、今はこの本の中だと上から見ているんですけども、ではこの辺の海岸の際のところはどんなだったのかなとか、それは植物が生えていたのかとか、だれかのいろいろな漁具置き場があったのかとか、浜小屋があったのかとか、そんなこともすごく具体的に知りたいのです。

それから、河口に港があったというときに、じゃあ港というのはどういふふうだんだん大きい港になってきたか。そのときに、どういふふう不便さが解消されたとか、そんなことも知りたいです。あと、多分この戦後の段階から、どんどんと観光客の方がふえてくるんですけども、観光客の人が今と昔でどんなふう海で遊んでいたかとか、そういうことも知りたいのです。

とりあえず、ざっと見てください。

[Power Point]

これは昭和初期の風景ということで、鴨川漁港付近で、本当にこういう岩礁のところと、それから左が荒島で、それから右が弁天島とか、それからここももうちょっと引いてみたところで、磯がずっとあって、船を引き揚げるときに材木を置いて人手で引き揚げていた

りとか、網で巻いていたりしたのだと思うんですけども、ああ、昔の港というのはこんな感じだったのかということとか、より近くに寄った形でわかります。この漁船で何を捕っていたのかと、そういう話はまたぜひ聞かせてください。

[Power Point]

これも「加茂川河口の旧漁港」ということで、河口に港があったということで、そうすると、昔の川というのは水が流れるだけではなくて、本当にそこが静かな水面だから、船をもやっておいて、それで沖に出すところの本当にお家と近いところだったのだというのがわかりますね。これもこういう状態から、徐々に沖合に港が展開されていったということになるわけです。

写真の後ろが加茂川橋で、奥は現在の新加茂川橋です。

[Power Point]

今も鴨川漁港は県内でもすごく元気な漁港の1つなんですけども、昔は浜がこうやって荷揚げ場兼市場みたいな状態になっていて、本当に浜の賑わいが違ったのだと思います。

これは、こっちが大浦港のブリです。それから、こっちが加茂川河口の、やはりブリの水揚げです。この水揚げで、今も漁港で水揚げをされているんですけども、浜で水揚げをしていた時代は、浜から大八車だとか、背負子とかで、人がもうちょっと持っていったり、加工したりとか、仲買の人が来たりということで、浜から人が出入りする導線というのですけども、人の出入りの状況というのがまた違って、海岸というのも、もっと鴨川にとって違う意味だったのだと思うんですね。これが漁港に隣接した砂浜の賑わいということだったと思います。

[Power Point]

これは大謀網、このブリ漁があったとき、やはり大謀網とか、あとこれは沖で揚繰網ということですけども、もう本当に人手で網を揚げるということで、本当に大変な労働だったと思うんですけども、こういう写真が残っています。

これは本当にたまたま後ろに風景が写っているので、大体今の地図でいってどの辺ですかというの、この写真を撮ったのは恐らくこの辺だよというのをそっちの大きい図のところに入れていただくということもできるのではないかと思います。

[Power Point]

これも、こんなところだったのかと私も思ったのは、まずこれなんですけども、「カジメの天日干し」ということで、今はカジメというのはほとんどごみみたいに思われていま

すけれども、これをきちんと並べて、それで海岸に干してあるのですね。それで、当時からカジメというのは肥料になっていたとか、それから鴨川化成の原料にということで、後で鴨川化成の話もちょっと聞きたいのですけれども、日本が戦争に負けそうになったときにはいろいろなことを考えて、海草からネバネバ物質をたくさんとって、それで火薬を固めて武器にしようとか、いろいろなことを考えていたことがありました。そのときに海草などもすごく需要があったので、多分この沿岸なども海草工場などはたくさんあったのではないかと思います。

あと、例えば子供と海岸ということで伺いたいのは、ここにお子さんたちがいるのです。そうすると、親御さんたちがここでカジメを干していると、こういう簾を立てて、子供さんたちを日陰のところに置いて、それでここの上にお弁当を吊してあるらしいのですね。竹のところから下がっているのはお弁当袋みたいなのですけれども、そういう形で、では家族の働く場所であって、子供がその近くにいたような前原海岸というのもあるのだと思います。

それから、これは場所不明で、「鴨川名物地引き網」と書いてあったのですが、これも皆さん笠をかぶって、それで引いていらっっしゃいます。

[Power Point]

昭和 35 年ごろの風景で、「鴨川海水浴場の無料休憩所」ということで、南房総国定公園で、鴨川町観光協会無料休憩所ということ。こういった休憩所が海岸のどの辺にあったのかとか、どんな建築だったのかとか、例えばシャワーだとか、あるいは今後、環境のことなどということになると、シャワーなどはどうしていたのかとか、使った、使わないとか、そういうことなども、実は結構、砂浜の環境みたいなことにとっては、その時代、時代にどうしていたかということが大事なので、それもぜひ知りたいところです。

昭和初期の風景で、これは多分、宣伝の写真か何かで、「鴨川海水浴場 両国から 5 時間」とか言って、観光の宣伝写真だと思うのですけれども、こういうような、本当に遠浅の砂浜というので、当時はやはり遠浅ということが 1 つの売りだったということになると思います。

これは下の方は昭和初期ですね。

[Power Point]

これはだんだん大きいところの写真で、昭和 4 年の 4 月 15 日、「鴨川駅 房総一周線完成開通式」ということです。これは鴨川駅前なのだと思うのですけれども、こんな感じで

結構近くまで田んぼがあって、この通りは基本的にはあるのだけれども、どこまでが集落とか、そんなことがわかると思います。だから、徐々に観光地だとか、市街地が発達してきたかというのがわかると思うのですね。それから、鉄道が通っているところというのは結構いい場所というか、災害に遭いにくいところを通っているのです。だから、砂の小高いところだとか、そうすると、鉄道というのは結構安定しているのですけれども、周りのところというのは田んぼになっていたりとか、その次にいい場所が古くからお店、お家のあるところとかで、多分こういう集落の張り付き方を見ると、そこ下の地盤だとか、そういうのもわかるのです。

[Power Point]

右が「昭和 10 年ごろの風景」ということで河口ですね。これが待崎川の河口で、それで釣りをしている人というのが写っています。昭和の始めのころという、例えば森鷗外とか、ああいう文人の人などもそうなのですけれども、河口というのはすごくおしゃれな場所だったのですね。今だと、河口というのは何か臭いとかいうイメージがあるところもふえてしまったのですけれども、河口に住んで毎日釣りをしながら絵を描いたり文筆活動をやるというのは、あの時代のすごくハイカラな生き方だったみたいで、日本のあちこちに河口の絵葉書とかが残っています。そうすると、釣りをしていたりとか、湿地があったりだとか、本当に海と川が出合うところで、写真の撮り方なども、川を抜けたらパッと海だったという感じの写真を撮ってあったりします。

それから、これは昭和 22 年ごろの風景で、待崎川の河口で、ずっと崖みたいをやっているのですけれども、ここもやはり砂がたまるということが問題になっていたの、それで随分とこの砂の処理には苦労されていたようです。

[Power Point]

これもすごくいい写真で上が大正時代の風景です。永明寺さんの境内と両脇の松林ということで、今は保安林になっている松林というのは結構うっそうとしていて、人が入るにはちょっと薄暗いということで、まず通れない感じなのですけれども、このサイズがこういう感じで並んでいる。そういうところを散策するというのが観光客の人も非常に心なごんでいたということもあるし、地元の人も海辺の松林というのを大事にされていたのだと思います。

ちなみに、これは旧国道 128 号線です。だから、128 号線というのは、昔はこういう景色だったのだなというのがわかるかと思います。

それから、下が「明治 40 年ごろの風景」で、この写真をよく撮っていた人がいたなと思うのですけれども、明治時代に女の方が手をつないで輪になって何か踊っているのですね。これもどういう踊りなのかなというのが私もわからないので、ぜひ知っていたら、女の人ばかりで輪になっていて、砂浜でやる踊りがあったのだと思います。それから、結構大きい船がここに、渚のところにとまっていたりとかするので、これもどういうものなのかなということです。

だから、推理小説と一緒に、こういう 1 枚の写真の中から、いろいろなことを発見していくというか、ある人が見たらこれはどういうお祭だというふうになるし、砂浜の人が見たら、この幅の広さだとか勾配だとか、それからもっとマニアックになると、足跡のつき方があるのですけれども、足跡が残る砂の状態というのがそういうのでわかったりとか、それから、ここに船があったりとか、いろいろなことが 1 枚の写真から読み解くことができます。

[Power Point]

これが鴨川シーワールドの建設工事のときの写真です。「昭和 45 年の風景」で、本当に高度成長真っ盛りของときにこういうふう成長されて、ここに建設されていったということになります。だから、こちらから見ているので、ほかの鴨川の高い建物がどうだったかとか、それも見るすることができます。

多分、いろいろなお家とか会社に竣工記念とかいう写真がると思うので、それもぜひお寄せいただくと、いろいろな情報がわかると思います。

これはきっと、水族館だからプールのな水槽の建物とか、結構おもしろい工事をされたのだと思います。

これが、シーワールドのこの写真が昭和 45 年ですけれども、下が「昭和 40 年ごろの風景」で、「観光施設建設前の東条松原海岸」の写真です。だから、ここがまだ松をいろいろ植林している途中みたいな写真だったりとか、あと草の植生ですね。ハマヒルガオとか芝とか、ああいうものが生えていそうな、そういう状態の写真です。それで、道路がここに走っていて、松林を道路が向こうにやっていたということになるわけです。

[Power Point]

現状なのですけれども、きょういろいろ見ていただいたと思うのですけれども、鴨川というのは自然が残っているのだけれども、結構何だかんだ言っても人の手が入っている部分がありまして、こういう砂丘の植生ということで、自然の、元々野生植物としてここに

いたものもいるし、あと帰化植物として入ってきたものもいるし、あと少しでも、砂浜を固定するために緑化としてまかれた植物の仲間などもいます。

基本的に、皆さん御存じのように、植物が生えられるところというのは海の波がさわらないところで、陸上植物が枯れずに残るところですから、その先の方が枯れ出したりとか、根っこがあらわれるようになったら、やはり侵食がひどくなったなということがあるわけです。これがどんどん枯れてきてしまうと、この植物も枯れて、それで飛砂が飛んだりとか、そんなふうになってしまうわけです。ですから、「環境」といったときにいろいろな環境がありますけれども、植物が生えていたら、そこにいろいろな昆虫がいたりとか、小動物がいたりということで、砂浜というのは、こういう草原というのは結構、環境としては海から陸に至る連続装置として必要です。

実は、こういう風景は一時は、特にバブルの時代は、海岸に草が生えていると雑草だから整備してプロムナードにしてしまおうか、「雑草」と言われていたのです。だけれども、雑草と思うと雑草に見えるかもしれないのですけれども、花がやはり四季折々咲くのですね。それから、いろいろな香りのするものが生えていたりとかして、あと食べられるようなハマボウフウとかハマニンニクとかもあるので、雑草だと思わないで、やはり鴨川にずっと昔からある植物なのだなと大事にしようと思うと、かなりいろいろなものがまだ点々と残っています。それも、今後、例えば砂浜を生かしたいろいろな考え方をするときには、どんな植物が残っているかというのは結構大事ですね。

[Power Point]

海岸の現状ということですが、皆さん、もうよく御存じだと思いますけれども、鴨川の海岸のおもしろいところというのは、やはり砂浜と岩礁帯とセットになっているというか、本当に一望できる中にそういった景観があるということだと思います。

これは、海の中の生態系も、砂浜の生態系と岩礁の生態系と両方あるということで、わずか 4km の区間でも本当にいろいろな生き物がいるし、それに応じた水産物もいるということになります。

[Power Point]

利用面は、これは市場、それから漁港ということで、漁港は本当に非常に活発な水揚げを誇っていて、また後で必要があれば漁港課さんの方からも報告していただいてもいいのですが、本当にこういった水揚げが見られて活気があるということも、鴨川の町の 1 つの大きな特徴だと思います。

[Power Point]

フィッシャリーナとかプレジャーボートというのはきょう見ていただいたとおりですね。

[Power Point]

そうしたら、ちょっと古い写真の方に戻って、せっかくなのでいろいろな地元の方に来ていただいているので、パワーポイントだから、一覧みたいにできますか。どの写真について、これはコメントしていただけるというものがあつたら、何かお話しいただけるというのですが、どうでしょう、これはという写真はありましたか。

[Power Point]

○水谷 はい。

○清野アドバイザー お問い合わせします。

○水谷 それでは、私は東条のホテルの水谷と申します。

今、出ている写真はちょうど私の世代でございますので、知り得る中で若干御説明いたします。

この右手のカジメを干しているものでございますけれども、これは先ほどフィッシャリーナをごらんに行かれましたあの周辺のところ、今、マンションができておりますけれども、あの一隅に魚の工場が実はございました。その前の時代のカジメでございます。これは先ほどお話がありましたように、鴨川化成のアルギン酸だとか、いわゆる手術をするときの糸、こういったものに利用されたものですから、私どもも親に連れられてカジメを採りにいったと、そういうふうなことで、今、本当に懐かしさを感じております。

それから下の、これは地引ですけれども、編み笠をかぶっているというのは大分古いものだろうと思っておりますけれども、これは前原海岸一帯で網元が大体 3 軒ぐらいありましたので、この辺を使った地引き網でございます。

以上でございます。

○清野アドバイザー ありがとうございます。

きょうお話を伺って、本の中は年代不明、場所不明ということで、鴨川ということだけはわかっていたのですけれども、本当に詳しい話がわかりました。そうすると、子供さんたちが親御さんたちと一緒に打ち上がったものとか、磯に生えている海草と一緒に採ったということになるのですかね。

○水谷 それもありますし、採りに行ったりしました。

○清野アドバイザー 採りに行ったということですね。そうすると、水産加工場とか、本当に

海草工場というの、大体今、フィッシャリーナのあるこの背後地あたりが中心地だったということになるのでしょうか。

○水谷 そうですね。

○清野アドバイザー ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか……。

[Power Point]

そうしたら、これは昔の駅の写真だと思のですけれども、駅から海に行くときというのは、本当にこういった大きい道路に行くということだったのだと思のですけれども、この畑がだんだん消えていったというか、それはいつごろになるのですか、だんだん市街地化されていったというのは、これは昭和 4 年の、だからある程度御高齢の方じゃないと御存じないかもしれないのですけれども……。

○宇多アドバイザー これはこうなっていないでしたか。ここは砂丘の上でちょっと小高くなっていて、嘘かもしれないけれども、その後ろがちょっと低いのではないのでしょうか、それから駅の方に行っていないですか。

○会場 それはないです。

○宇田アドバイザー それはない、ごめんなさい。余計なあれだった。

○清野アドバイザー 結局、それはここまでが砂丘だったのか、それとも、砂丘の幅というの実はここまであって、鉄道が通っていたのがどうだったのか、ここに何を植えていたかによって結構違うのですね。仮にここがハスぐらいしか植えられなかったとかいうと結構ベチャベチャしていたところで、だけれども、ここがネギとかを植えていたというサクサクしたところだったのかなというのがあるわけです。

○会場 田んぼですね。

○清野アドバイザー 田んぼですかね。

○宇田アドバイザー 余計なお世話なのだけれども、この上側に見えるのは待崎川ですか。

○会場 そうです。

○宇多アドバイザー それ、こう流れて、右の方に流れてきているのは待崎川ですよ。駅からあんなに近かったのですかね。そうすると、この手前にあるこれにひっついてはいますね、この水路、何となくこう。ということは、家屋が非常に密集しているところのちょっと裏は田んぼ、ちょっと湿気っぽい土地で、その裏側のところに駅が来たという感じに見えますよね。

○清水 長狭街道がこっちからこう来て、藤徳さんのところまで下りてきて、この道路はなかったのです。これが通りだったのです。この道はなかったのです。

○宇田アドバイズ 駅のためにつくったのですか、それは。

○清水 そうです。

○宇田アドバイズ 海岸線に通っていたわけですか、ずっと。

○清水 あの道が本道だったのです。

○宇田アドバイズ ああ、そういうことなのですか。

○清野アドバイズ これは砂丘、こちら辺は……。

○清水 それで、待崎川の左側です。この道が本線です。

○清野アドバイズ そうなのですか。

○清水 長狭街道を下りてきて。

○宇田アドバイズ そうなっていたのか、これは。

○清野アドバイズ なるほどね。

あとほかのこの写真はいいですか。

あと松林の保安林が、そうですね、これも……。

[Power Point]

これは一応、昭和40年ごろの風景で、きょう皆さんが見た海岸に生えている松というのがいつぐらいからかというのは説明がありましたか、なかったですか。このあたりの保安林がいつぐらいから植えられたとか、こちら辺はもう見事な松林になっていますけれども、それはどうでしょうか。もっと本当の砂丘だったときから、昭和40年ごろにはもうちょっとうっそうとした風景になっていたのだと思うのですけれども。

○清水 その通りの右側は50年ぐらい前に植林したものなのです。

○清野アドバイズ そうですか。こちら辺は50年前ぐらいだから……。

○清水 50年ぐらい前の植林で、右側に砂浜があるでしょう。

○清野アドバイズ ええ、この辺。

○清水 ハマボウフウだとか、そういうふうな植物がいっぱいありました。

○清野アドバイズ なるほどね。ここは本当に今おっしゃったハマボウフウとか、ハマヒルガオとかものすごくいろいろ生えていたのではないかと思うのですけれども、今は結構減ってしまっているというか、どんどん、ちょうどその植生帯の部分にいろいろ人間の通る道をつくるというのが普通なので、どうしても下敷きになってしまうのだと思うの

です。これは本当に浜幅というのが空中写真からだけではなくて、横のこういうスケールでもわかる場所ですね。今おっしゃった植生というか、ハマボウフウみたいなものは鴨川の方は結構大事だと思っていたか、どこにもでもある……。

○清水 大事じゃない。(笑声)

○清野アドバイズ 大事じゃない。(笑声) 食べてはいたのですよね。

○清水 食べてません。

○清野アドバイズ 食べてなかったですか。今も、ハマボウフウだとかもし生えだしたとしたらどうですか。だれか採る人とかいるのですか。それとも全然……。

○清水 食用に供せるかどうかということを知りませんでした。線路のそばにあるノビルだとかスカンポだとか、ああいうふうなものをかじって飢えをしのいでいました。

○清野アドバイズ なるほど、わかりました。ハマボウフウは多分千葉県内は、東京から刺身のつまにするので、業者さんが採りに来てしまうので、ここに生えていますと言っただけでいけないうぐらい今は大事になっていたりするのですが、なかなか野草の時代には大事にされないことが多かったと思います。

[Power Point]

あと漁業関係で、さっき漁港の話がありましたけれども、このあたりの漁港の時代を覚えていらっしゃる方というのはおられますか。だから、今の近代的な漁港になる前で、ここはすごい急勾配のところだったりとか、崖の近くまでお家があったりとか、ぜひ何かその……。

○清水 場所はどこのかというのは。

○清野アドバイズ ここは今の漁協あたりだそうですね。

○宇田アドバイズ 右が弁天島。

○会場 手前のところがフィッシャリーナ。

○清野アドバイズ ここが……。

○会場 加茂川の河口だ。

○宇田アドバイズ 一番下が加茂川。

○清野アドバイズ ここがですね。

○宇田アドバイズ 左の島が荒島、右が弁天島でしょう。

○清野アドバイズ この三角形の。

○宇田アドバイズ じゃあ、ちょっと、お願いします。

○清野アトバヱー はい。

○山本 私は鴨川の漁業組合長でございますけれども、では、ちょっと説明させていただきます。

○清野アトバヱー ぜひよろしく申し上げます。

○山本 ぜひにということで聞いておりましたけれども、私は 80 年生きておりますので、この辺は私が子供のときの写真なのですね、これは。ほとんどここから水揚げをしておって、この当時はここには市場はなかったのです。市場は川の中だったのです。今のフィッシャリーナはこっちの方でした。これが加茂川ですから。それで、これが港で、今の沖の防波堤がこうなっていますね。これは旧港ですね。それで、これが川の縁になっていまして、まだまだこっちだと思いました。これは昔はひん曲がっていたのですね。今の山というか、この境がここにある、今の港はこれから防波堤が出て、こっちの方へ入っていますから、これは全部防波堤はつながってしまっていますから、この山の向こうが港になっています。漁港になっています。今ここに、この山の間を抜けて道路がこういうふうにならないうつながついて、こっちに海岸道路ができていますね。それで第 3 の橋がここにかかっておりますから、これはたしか中だと思います。まだここに港があって、ここに川があるわけです、昔はね。川港でございましたから。

これが防潮堤ができたために、この砂がみんなこっちに来てしまったのですよ。春から夏になると南風が吹くわけですね。それでこの砂が全部こっちへ来るのです。ここが広くなるわけですね。それで秋になって北風が吹くと、今度は全部こっちに来てしまうわけです。ところが、いつの間にか防潮堤ができたから、ここへ砂が埋まってきたわけですね。動かなくなったのです。だから、ここは少なくなりっぱなしだと、こういう状況で、私の知っている範囲はそこらなのですから、80 年生きてきているのでね、この港とともに生きてきていますから。(拍手)

○清野アトバヱー もう少し漁場についても、この今の写真の範囲でどういう漁業、例えば刺し網とか……。

○山本 私は旋網漁業をやっているのですが、子供のときからやっているのですが、やはりこの辺一体がそうなのですね。それで、やはり汚染されていますから、部落等が少なくなっているわけですね。ですから、この辺で余りイワシなどは捕れなくなってきましたよ。みんなこっちの水深 10m 以深でなければ捕れないです、今はね。昔はこの辺でみんなやっていたけれどもね。終戦後もみんな、ここら辺は漁場だったですよ。いつの間にかこ

れはなくなってしまって、生活排水や何かで汚れて、プランクトンが少なくなったのでしょね。いなくなってしまったので、水深 10m 以浅でやるということは、たまにはやりませうけれども、最近はなくなってしまいました。この辺はほとんどやらないですね。ほとんどこっちの方、30m 以深の方へ行ってしまうと、操業体制が。そういう状況ですから、とにかく海を汚さないことですね。汚してもらいたくないです。(拍手)

○清野アトバヱー 今のイワシのお話で、魚見崎というのは……。

○山本 生活排水とか浄化槽ですよ。

○清野アトバヱー 今だと、どうしたら山からイワシの群れなどが見えるのだろうかと思うのですが、昔はすごく近くにいたのでしょうかね。

○山本 生活排水が流れるから、自然に流れてきますから。全部川を伝わって流れてくるのですよ。浄化槽をつくったって、みんなここを伝わって流れてくるのですよ。全部川へ流れていますから。浄化槽だってきれいなようだけれども、自然に汚れているのではないですか。魚が一番よく知っているわけで、いないのだから。私が子供のときにはいたのだから、終戦後はいたのですね。昭和 35 年ぐらいまでいたかな。40 年代ぐらいになったらもういなくなってしまった。たまにはいますよ、潮の流れで。沖から潮が来れば、ほかへ汚水がやられれば出てきますよ。

○清野アトバヱー 刺し網とか、そういうのはこの範囲はどうですか。

○山本 それはやはり、刺し網もこの辺にやりませうけれども、ここでも少なくなっていますからね。自然淘汰で、もう自然に沖の方へ行っていますから。私らが子供のときにはこの辺で商売していたのですがね、今はこの辺では商売になりませんよ。

○清野アトバヱー ここは、昭和 10 年ぐらいは揚網網というのは結構近くで引いていたわけですね。

○山本 終戦後はみんなこっちだったですよ。これは終戦後の写真ですよ。

○清野アトバヱー 終戦後ですか。

○山本 はい、エンジンがついた船は終戦後でなければありませんよ。だから、みんなこういうふうに分けてやって、若い衆はみんなこういう船に乗ってやっていたのですよ。

○会場 みんな裸……。

○山本 みんな裸です。これは夏の写真ですよ。だから、陸が見えるわけですよ。これはみんなこの湾の中ですよ。水深 10m ぐらいのところでしょう、恐らく。20m といったら、この当時は海は深かったですよ。この網をみんなここへ持ってきて、干したのですよ、こ

の砂浜で。

○清野アドバイズー 前原海岸というか、砂浜で干していらっしやったのですか。

○山本 川からこっちへは来ない。この辺で干していた。そういう状況で、大変だったですよ、大八車に網を積んで。綿の網というのは干さなければ腐ってしまうのですよ。

○清野アドバイズー それはすごく大事で。

○山本 昔の話を聞くのだったら話しますけれども、またいろいろな具合で、昔はみんなこういう私らみたいなのがありましたから。終戦後もこれはやっていました。大体、機械化されたのが昭和30年ぐらいですか、ナイロンになったのが28年ぐらい。網を干さなくなったのが30年ぐらい、ナイロンになってから網を干さなくなった。要するに、ぬらしておいた方がいいわけですね。綿の網のときは干さなければ腐ってしまうのですね、3日干さない。何が何でも干すわけですね。

○清野アドバイズー 綿の網だから、干さないで腐ってしまう。

○山本 ええ、腐ってしまいますから、だから、干すわけですね。大八車でここまで運んで。

○清野アドバイズー これを干すのというのは結構大変なことで、大八車で……。

○山本 でしょうね、昔はこんなに人がいたのですよ。

○宇多アドバイズー 清野さん、ちょっと済みません。今の話の続きで、この方も、干鰯をつくっていたという話があるのですが。

○山本 え……。

○宇多アドバイズー 干鰯、イワシ……。

○山本 ですから、捕ったイワシは、氷も何も無いから腐ってしまいますから、干鰯以外にないわけですよ。

○清野アドバイズー 空撮の一番古い写真で……。

○山本 終戦後はこれ、九十九から捕ってきたって、鴨川へ持ってきたのではクシャクシャになってしまうでしょう。全部、干鰯ぐらいにしかならないですよ。煮干しにもならないですよ。

○清野アドバイズー 干鰯をつくっていたり、網を干していたころというのはここ……。

○山本 この川とこの川の間です。大体この辺ですよ。ここはめったにやらないですね。ここは使いましたね。

○清野アドバイズー こことここというのはどうしてですか。

○山本 ここには旋網がありましたから。ここには煮干し屋さんが随分ありますから、この人たちがここを使っていましたよ。こっちの人は……。

○清野アドバイズー ああ、こっちの人はこっちの方、ここはまた……。

○山本 そういう具合ですよ。ここに旋網がありますから、あれは○○○○○○○○のところとか、こっちにもありますから、この人たちはここに干す、ここは岩場でしょう。干すところがないからここへ干したわけ、干鰯をね。ここは余り使ったという記憶はないですね。

わからないところがあったら、幾らでも説明しますが、私、説明はへただからね。

(拍手)

○清野アドバイズー 干鰯と言ったら、若い人は知らないかも……。

○山本 干鰯は稲の肥料ですから。田植えになると稲の根元へみんな入れてね。1匹ぐらいずつ入れて、稲を発育させるために。昭和初期だから幾らか知っているのでしょうかけれども、大体そんな具合ですね。干鰯以外につくるものがなかったのですよ。煮干しにしたり、粉になってしまいますから。氷はないでしょう。まず、氷を使い始めたのは昭和30年以降ですから。

○宇多アドバイズー 冷蔵庫はないか。

○山本 ないですよ。氷がないのだから、あるわけがないでしょう。イナダやワラサを捕ってきたって、その場で処分しなければだめですよ。氷がないのだから。

○清野アドバイズー 氷が入ってきたのはいつぐらいだったのですか。

○山本 氷はつけてきて揚げるから、鮮度が保たれるわけ。

○清野アドバイズー 鴨川の漁村に……。

○山本 だから、漁港も川の中であって、船が大きくなると、このぐらいの船になるともう入らなくなってしまふ。

○清野アドバイズー 河口の漁港の、ちょっと伺いたいのですが、済みません、いつまでも帰さなくて申しわけないですが……。

○山本 これは昭和初期ですよ、この写真。ブリがかかっているでしょう、これ。これは昭和の初期ですよ。私が子供のときですよ、これは。

○清野アドバイズー すごいですね。

○山本 これだって氷がないのですね。

○清野アドバイズー 氷がないときは、結局これは砂浜に揚げた後、どうしていたのですか。

○山本 これは万丈籠といって、そうですね、どのぐらい入るかな、50 貫ぐらい入ったのかな、40~50 貫ぐらい。籠ですよ、これは。これは籠ですからね、ここに手がついているでしょう。

○清野アドバイザー こういう竹で編んだ籠の中に。

○山本 そう、竹で編んでね。こういうものしかなかったですね。

○清野アドバイザー それは鴨川で捕れたブリはどの辺まで運んでいたのですか。

○山本 それは、私は子供だから記憶にないですけどもね。何かしら処分したのでしょう。処分しないで、捨てるわけではないですからね。処分したと思いますけれども、どういう処置をしたか、それまでは私は覚えていないですけどもね。昔はみんなこういうタイプでしたね。

[Power Point]

○清野アドバイザー さっきの河口の漁港の話、これは結局もう家の前からすぐに船に乗るような感じだったのですね。

○山本 こうい業者がいっぱいいましたからね。さっきちょっとお話をしたでしょう、船が遭難して 8 人か 10 人ぐらい、河口で亡くなったという。あれは波があったのに出て、帰ってきたら、船を引っ張ってきたのが、波に乗ると船は速いでしょう。けつの船が速くなってしまっ、前の船が走らないうちにけつのが波に乗ってこう……。

○宇多アドバイザー 乗っかっちゃったわけ、ぶつかっちゃったわけですか。

○山本 乗っかっちゃった、そうそう。

これは懐かしい写真ですね。私も懐かしいです、これは。私が子供のときですからね。

○清野アドバイザー 今の河口の港は……。

○山本 これは河口ではないですよ、これは中磯ですよ。

○清野アドバイザー これはすごい……。

○山本 これは全部船曳場ですよ。

○清野アドバイザー これは自然の崖があって、その崖のちょっと平らなところに入れていたのですかね。

これは何の船ですかね。

○山本 これは今見ると何の船だろうね、これは夜釣り船でしょう。一本釣りでしょう。

○清野アドバイザー 夜釣りですか、一本釣り。随分人が乗っているのですね。

○山本 ええ、一本釣りの船ですね。

○清水 奥の、今の港はなかったのですか。

○山本 この向こうですか。

○清水 ええ。

○山本 弁天島の方は全然ありません。

○清水 なかったのですか。

○山本 はい。全部石原です。

○清水 あの上の写真はどこですか。

○清野アドバイザー 昭和初期の。

○宇多アドバイザー 何も無い。

[Power Point]

○山本 この写真ですよ。ちょうどこれですね。ちょうどこういう状態です。

昭和 28 年の御開帳の写真、このままでしょう。弁天島は知っていますね、皆さん、鴨川の人。あの御開帳があるわけですね。28 年のときはみんなこんな状態です。まだ堤防はないですよ。南があったのです。沖はこの状態ですよ。写真を見ればよくわかりますけれども。

○清野アドバイザー 御開帳は何年に一遍ですか。

○山本 30 年に一遍です。

○清野アドバイザー 30 年に一遍。じゃあ、30 年ごとに写真を撮って。

○清野アドバイザー 58 年に本開帳をやりましたから、今度は平成 25 年が中開帳になるわけですね。弁天島のここにお宮があるのですよ。弁天様が飾ってありますから。

○清野アドバイザー 今は弁天島で島だったときと、周りに港ができたときと、神社の周りの雰囲気は違いますか。

○山本 今は陸同士で行かれますからね、橋もかかっているし。

○清野アドバイザー 昔は弁天様にお参りするのは船で行ったわけでしょうか。

○山本 そうですね。昔は船でなければ行かれませんでしたから。

○清野アドバイザー それはやはり鴨川の漁師さんにとって弁天島はすごい大事なところ、信仰の……。

○山本 そうそう、信仰の神、大漁の神様、海難防止のね。

○清野アドバイザー 海岸を……。

○山本 海難防止ですね。海上安全を祈願をしてね。大漁満足と両方ですから、漁師は信

仰しているわけですよ。

○清野アドバイザー どうもありがとうございました。

○山本 そんなところですかね。説明がへたで申しわけございませんでした。(拍手)

○清野アドバイザー どうもありがとうございました。

そのあたりでもう少し補足でどなたかお話をされることがあったら、ぜひ教えてください、どうですか。隣の人だけに話さないで、お話しただけるといいのですけれども……。

あと少ししかこういう古い写真についての時間がないのですけれども、本当に私もきょうトークショーみたいにやっていただいて、いろいろなことがわかりましたし、こういう海岸の会議をやることのおもしろいことというのは、この資料集の本で、ずっと役場の資料室の中でも、しばらくだれも見ていませんという感じで日焼けしていた本なのですけれども、こういう会があって、この写真に写っているものが何なのかということがどんどんわかるようになって、それが具体的に海岸を鴨川の人がどういうふうに使ってきたかとか、利用されてきたかということがわかるのですね。

[Power Point]

さっきのブリの竹籠が写っていた写真、私もお魚ばかりに目が行っていて、ここに竹籠があるのを忘れていたのですけれども、私が千葉の海岸の計画をお手伝いさせていただいたときにすごく面白かったのは、千葉の方というのは山に行けば、山とか川端に竹がたくさん生えているから、昔はホームセンターとかに行くわけではなくて、何か自分でつくるというときにパパッと行って、竹で本当に籠を編んだりとか、漁具に使ったりということで、たまたまこれも竹が出てくるというか、こういうときに指し棒に竹が出てくるというのはやはりすごいなと思ったのですけれども、(笑声) 竹を結局こうやって使っていて、それが壊れると海に行って、それは自然物だからごみになったとしても、またそういった自然に戻っていくのですけれども、千葉県で里山の話というのは今、随分盛り上がっているのですね。

里山で人が行って、木の下枝を刈って、それを粗朶にしていろいろなものに使ったり、あと竹を切ったりとか、それで随分と身近な自然というのが管理されていて、何かそういう、その当時はみんな不便だと思っていたと思うのですけれども、やはり鴨川の近辺も山があって、川があって、その川からプランクトンがわくような水がずっと湾の中に入っていて、湾の中だからある程度それがたまって、たくさん動物プランクトンがわいていたのだと思うのですね、植物プランクトンとか。それを、カタクチイワシが湾の中まで入っ

てきていたというのは、本当にきょうすごい情報をいただいたと思います。

今回は海岸の会議なのですけれども、結局、では海水浴場としての水質とか砂だとか、それからじゃあ、どうやってこの地域で海岸を大事にしていくかといったときに、海岸が中心だけれども、川のこととか山のことというのもちょっと頭の隅に置いていただきながら、どんな暮らしが鴨川にあったのかというのをいろいろ教えていただけると助かります。

こういう1枚1枚の写真もそうですし、それからさっきの空中写真も、これから市役所さんとかに置かせていただいて、何か記入をしていただいたりとか、書くのが面倒くさいということでしたら、電話をいただければ、だれかが録音を取りに来たりとかしますのです、ぜひそれに協力してください。

今回、公共事業の話だと思って来られた方には、「え、何で」と思われるかもしれないのですけれども、今、日本中の海岸で学校とか子供たちとか、あと私みたいに研究をしている人が、地元の人が知っていることを今聞いておかないと、もうわからなくなってしまいう時代に入っているのです。そのときに、じゃあまた海岸をどう戻せばいいかという話とか、ここの海岸を、では長い目で考えようと言ったときに、昔のことがわかればまたすごいヒントになるのですけれども、今の現状だけ見ながら考えるという、すごく手当てをするだけになってしまうのです。

だから、今本当に80年見てきたというお話の中で、徐々に水質も悪くなって、魚も沖に出ていってしまっている中で、1つ風邪を引いたような状態に海岸がなっているのだと思うのですね。それは今、風邪薬を飲むだけではなくて、何で風邪になってしまったのかというのを知るというのもすごく大事だし、風邪だったらまだ治せるのですね。県内でも重病になってしまったところとかはなかなかちょっと厳しいというか、死なないように頑張るといえるところがあるのですけれども、鴨川はまだ海岸としては風邪を引いているということと、あと私が鴨川の方にすごく期待を寄せているのは、こういうポケットビーチで、ここに入っている川が自分たちの見える範囲の山から流れてきますね。だから、ここをよくしたいと思ったときに、ここの範囲で住んでいる人とかが、住み方とか畑のやり方とか、砂をどうするかということを、この範囲で考えられるというのはすごいメリットなのです。

千葉県内でいろいろな海岸がありますけれども、例えば今やっている三番瀬などは、余りにも関係する人数が多過ぎるのと、隣の県とか都とか、川が入ってくるときに群馬県ま

で頼みに行かなければいけないのではないという話になってしまうと、もう群馬県の人に三番瀬のことを考えてくれと言ってもちょっと無理なのですね。だけれども、ここだとやはり鴨川のみを考えるために、鴨川に住んでいる人とか、山から水が下りてくるのだから、カタクチイワシの餌になるものがわくような、川沿いに住んでいる人にもちょっと海岸のことも考えてと言ったら、話せる距離なのです。

だから、私がこの鴨川にそういうことで関わらせていただいて、本当に期待しているのは、そこをやはり地元の知恵とか、そういう歴史を整理していく中で、過去を勉強すると何を今後すべきかというのがわかると思うのです。だから、何回か回を重ねていく中で、それぞれ皆さんからもう少し情報をいただきたいし、その情報を年代別に落としていくと、例えばこれは今だけれども、古い写真を持ってきて、古い海岸のときには鉄道はここだったとか、田んぼはどうだったとか、ここでイワシが捕れたとか、そういうふうになるとすごく、もう少し客観的に物が考えられるようになるというがあるので、ぜひ御協力をお願いしたいと思います。

こういう会議というのは、それこそ今事務局をやっている人というのは鴨川ではないところから来ている人が、専門でとかアドバイスとかいうのは、一応こういう全体を見たことがあるから言っているのですけれども、基本的にはやはり皆さんが思い出して整理するお手伝いをしていくということになります。

私のところのコマはそろそろ終わりなので、こういうことで、ぜひ皆さんもアルバムとかに残ったりとか、仏壇の引き出しとか、そういうところに海の写真があったら持ってきてください。最近ヒットしているのは、おじいちゃん、おばあちゃんの初デートの海の写真だと、リーゼントのおじいちゃんとかピキニのおばあちゃんが出てきて、孫はびっくりという、(笑声) そういうのがあるのですけれども、そういう場合にはほかしとかを入れて、(笑声) 資料に使わせていただくこととかもあるので、あと、おばあちゃんがたばこを吸っていたとかいろいろなことがあるのですけれども、そういう1つ1つがこういうふうな情報になるというのがわかっていただけたかと思うので、ぜひよろしく願います。

これで私の方の願いとお話は終わりたいと思います。

ありがとうございました。(拍手)

○宇多アバイザ - もう少ししたら休憩しますが、この写真について、無機物である砂浜についてかなり情報が読み取れるので、それだけ2~3分。

[Power Point]

これはさっき聞いたけれども、裸ん坊で20人ぐらい乗っているのでしょうか、このぐらいの人が集まる漁村だったのです。それと、ブリがものすごく揚がっているところに、ねんねこで背負ったお母さんが立っていましたね。

[Power Point]

これですね。ちゃんちゃんこみたいなものを着せて。だから、非常に活気がありますね。この人たちは一体どこへ消えてしまったのかというぐらいすばらしい写真ですね、これは。全国いろいろなところにこういう写真はあっても、これだけ騒がしい声が聞こえてきそうな雰囲気があったということはよくよく覚えていてほしいと思います。ここだけが別にあれではなくて、これだと、多分町中がワアワアやっていたはずなのですね。夜は一杯お酒を飲んでという、我々と同じようなことを多分やっていたという、そういうイメージがすごくよく伝わる写真だと私は思いました。

[Power Point]

これはちょっと余談、これはパス。

[Power Point]

これがすごく重要なので、うねりが1本沖に来ていますね。白波が立って波が砕けている。それが2段見えて、3段来て、汀線ですね。これ、さっき清野さんは遠浅だという表現をしていたけれども、全くそのとおりで、これは多分物理的には1/70~1/80の非常に緩やかな斜面で、しかも波の峰が汀線に対して並行に入ってきているということはすごく重要で、横に砂が動いてしまわない非常にシンプルに、波がセンターだと、あれが荒島だから、あれをこういうふうに眺める位置では非常に勾配が緩く、波がすっきり入るような形のビーチだった。それから浜辺はすごく広がったということは、よくよく考えた方がいいですね。

我々の今の技術でこういう緩勾配の遠浅の海をつくり出してみろと言われると、ほとんどできない。これは理屈上、できると言う人がいるかもしれませんが、これは天然の美しい海岸の典型例で、人間はそこまで傲慢にはやりようがない。だから、一たん壊してしまうと、こういうのはなかなか戻らないというぐらいこの写真というのはすごく重要だと、砂の方のことを研究している人は思うわけです。

[Power Point]

これはさっきもう言ってしまったのであれですけども、さっきの説明のとおりで、あそこ前側は小高い砂丘地で、そこにはやはり岬がいいですから、たくさんの方が住んで

いて、その裏はちょっと低くなっていて、それでまた駅になる。私、あした帰るときにあの道を歩いてみようと思うのですけれども、ゆっくりとしたそういうものが多分残っているだろうと思います。残っているから、だから何だということはないのだけれども、こういうふうな状態を経て現在になっているわけで、こういうことをやはり思い描いて、一体どういう姿に戻すのかということやはり大事なところなので、もう一回くどく写真をごらんに入れました。

[Power Point]

これはいいです、パス。

[Power Point]

○庄司 これ……。

○宇多アトバ イザ- これ、済みません、会場へマイクを、お話を伺いたい。

○庄司 その前原海岸、待崎川海岸のそれは多分、ランドホテルの方まで川が横に曲がって……。

○宇多アトバ イザ- これですか。

○庄司 そうです。その後ろ側は全部松林なのです。

○宇多アトバ イザ- ランドホテルというと、どっちに、こちらでもしできたら……。

○庄司 多分そうだと思うのですが。

○宇多アトバ イザ- 結構です。私は場所の土地勘がないもので。

○庄司 多分これは河口からこっち側に流れていっていると、感覚の中ではこう行っていると思うのですけれども、ここは全部砂丘なのです。

○宇多アトバ イザ- ああ、砂丘、裏側を見ている感じ。

○庄司 はい。

○宇多アトバ イザ- 松林があって。

○庄司 はい。だから、要するに、ここのこの裏側の方に、この川は横に……。

○宇多アトバ イザ- グルッと回っていたわけ。

○庄司 砂浜の海岸の松林沿いに、全部これがずっと川が流れていくのですよ。それでランドホテルの先に行ってから海岸に流れ込んでいたという。

○宇多アトバ イザ- ああ、そういう……。

○清野アトバ イザ- 本には「松林沿い」とか書いてあって、何も意味がわからなかったのですが、そういうことなのですね。

○宇多アトバ イザ- ああ、そういうことなのか。

○庄司 だから、「待崎河口」と書いてあるから、多分、待崎河口でこういう状態になるというのは、ランドホテルの方まで川が流れてつくられていってしまって、それであれしたのだと思うのです。僕らはここでこの松の根をツタ代わりに伝って上がって、ここで滑り台代わりにやったのですから。

○宇多アトバ イザ- やったんだ、悪ガキだったんだ。(笑声)

○庄司 それであるとき、冬に、ここで立っておりたら、そのまま川の中に落ちてしまって大風邪を引いたことがありますけれども、そういうことです。

○宇多アトバ イザ- ありがとうございます。そうか。

○清野アトバ イザ- ありがとうございます。

○宇多アトバ イザ- その次、何かありますか。

[Power Point]

これはさっき説明しましたね。

[Power Point]

これは弁天島ですね。この三角形のおむすびの形は弁天島ですね。

[Power Point]

ここに何か線が見えるのですけれども、これは何でしょうね。何となく透けて見えますね。護岸もまだできていない時代に、ハマヒルガオとか、これは要するに原風景ですね。ここは海の土地なのか人間の土地なのかよくわからない。砂浜のこっち側は松でもない、何でもないようなそういう緩衝帯があった。これはだから日本のどこの砂浜もこうだった。しかし、よく見るとこれはむだな土地にも見えるので、開発してしまおうということも行われたという、これもいい写真ですね。この波の具合が非常にゆったりと入ってきているところを見ると、これは非常に勾配は緩やかですね。ズードンと落ちた海岸ではないというのはこの砕波状態、波が砕ける状態を見れば非常によくわかる。だから、これでいつごろというだけではなくて、どういう砂浜の状態だったとか、どういう波が差していたのかというの読み取れるわけですね、私は。だけれども、ほかの面で読み取れる方もおられるので、さっき清野先生が言っていたように、いろいろな方の持っている写真を持ち出して、昔にもう一度戻して見てみようというのは、非常に役に立つと思います。

これでおしまいですね。

5分間休憩をしましょう。

○事務局 それでは、5分間休憩したいと思いますので、時計の針が35分ぐらいになりましたらまた始めますので、よろしく願いいたします。

〔暫時休憩〕

〔Power Point〕

○清野アドバイザー ちょっとここへ来ていただいて、この正確な話を伺って……。

○庄司 先輩がよく知っているのですよ、さっきの先輩。

○清野アドバイザー 先輩……。

それでは、ちょっとこの踊りのお話とか……。

○庄司 これは鴨川市の観光のためにやった盆踊り大会のものだと思うのですね。それで、その向こうにとまっているのが地引き網の船なのです、海岸に引いてある。

○清野アドバイザー ここに……。

○庄司 はい、その船が。

○清野アドバイザー そうすると、これは地引き網なのか、人がいて、何か置いてあるのですね。

○庄司 先ほど地引き網のシーンがありましたでしょう。

○宇多アドバイザー ええ、これは前原になるのですか。

○庄司 そうです、これですね。

○清野アドバイザー これ、笠をかぶっている。

○庄司 これは、東条海岸から前原海岸まで大体魚のいる位置を見計らってみんな船で行って、先に網をまいて、それで漁師が全部網を持ってきて、そうすると御婦人方というか、漁師の女たちが全部この網を引いて、全部揚げてくるのですけれどもね。私の子供のころは母親がこの役をやっていましたので。

○清野アドバイザー それは女性たちだったのですか。網を揚げるのは、女の役目だったのですか。

○庄司 そうです。だから、一番遠いところでロイヤルホテルぐらいまで行った記憶も覚えていますがね。

○清野アドバイザー ちょっとこちらに来て、お願いします。

○庄司 大体地引き網の範囲というのは、この辺から、大体このぐらいまでの範囲を全部地引き網をやっていたから、それで大地引き、中地引きとって、私の記憶の中では大きい地引き網の網元が2つありまして、それで大体この辺に網元が多かったのです。

それでもっとつけ加えて言うと、この川の真っ正面に、ここに一瀬、二瀬、三瀬といって、波の高さに応じて、一番大きいものは台風が来ると5mぐらいの波が来るのです。そうすると、ここの波だけはこの港の方から回り込んでこられるから、ここで波乗りができるというのは日本でも1箇所ぐらいしかなかったのです。世界でもほとんど、こういう体形のサーフィンができる場所というのはまず10箇所とないはずですが、でも、残念ながら、このマリナーのためにつぶされてしまいましたけれどもね。

○清水 地引をしていたのはいつごろですか。

○庄司 これはほとんど夏が多いですよ。

○清水 だけれども、夏はみんな裸で行くでしょう。

○庄司 いやいや、女の人はやはり肌は出しませんから、これはとうろくという着物で、作業着なのです。紺でできた作業着で。

○清水 裸で見ていたよ。

○清野アドバイザー ここにいる男の人は裸みたいですが、女の人は紺を着ていますね。

○庄司 そうですね。この漁師の人たちは、ちょっとエッチな形になるのですけれども、おちんちんの先に糞を巻くのです。糞とか、そういうものはしていないのです。それで、地引き網の船はこの辺に係留、浅瀬からちょっと離れたところに係留されて、そこからみんな網を出した人間が泳いでここまで、岸まで来るのです。そのころ、私も小学校のころと一緒に乗っけていってもらって、漁師が全部泳いで来てしまうものだから、しょうがないに私も泳いで帰ってきて、それで初めて泳ぎを覚えたというのがあるのですけれどもね。

○清野アドバイザー すごくですね。そう思って見ると、本当にこの着物だとか、ありがとうございました。すごく具体的なお話をたくさん伺って、いろいろ民俗学といいますか、(笑声) 自然素材の着物の話とかも聞いて、そうかなと思ったのですけれども。

それで、こういったお話をきょう思い出したけれども、ちょっと時間がなくて言えなかったとか、そういうこともあるかと思うので、最後にもお願いしますけれども、ぜひ昔の写真とか資料を鴨川市役所の都市建設課さんの方にお寄せくださいというのと、また事務局の方に御連絡いただければ取りまとめて、またこういう昔話をして、いろいろ発見する会みたいなのをやりたいと思います。

○宇多アドバイザー もうそろそろ一方的な説明は終わりにしたいのですが、あと5枚だけスライドを見ていただいて、時間にして6分ぐらい、その後は完全にオープンの御質問時間にします。

今までの和気藹々の話から、今度は辛い話を私にはしななければならないのですが、現に起こってしまったことなので、お話をせざるを得ないと思います。

[Power Point]

これは1997年、平成9年ですから、ことしの6年前の9月に、この1997年というのはエルニーニョというもので、日本に台風が7つぐらい上陸した年で、全国的にもものすごい被害が出た年です。この鴨川の沖合でも8mぐらいの波が寄せてきました。8mと云ったものすごい波ですよ。これは海ではございませんで、これはシーワールドの建物の中に、今、水がジャーッと越えて落ちてるのが見えますか、ジャーッと。これはここに立つことは不可能です、飛ばされてしまって。それで、このときに鴨川シーワールドの中の、これは海水を汲み上げるポンプとかいろいろなものがありますので、イルカが飛び回るの表の世界で、裏側にはそういういろいろな装置があるわけです。その裏側の装置が相当にダメージを受けた。だから、シーワールドの管理者から見れば、これはまいっちゃよね、何とかこういうことにならないようにしてくださいという声は起こるわけですね。あってもいいですね、不思議はない。

それで、ここのところは実は遊歩道があって、その護岸があるのですけれども、全然見えない。これはザーンと波が上がっている風景で、その後、これは何遍も災害が繰り返されているのですが、これはシーワールドホテルの個人でつくられた護岸の目の前に県につくられた遊歩道があるのですが、そこのところが、この護岸がありますけれども、実はこの護岸の下から全部砂が抜け出て、歩くとズドンと落ちるという状態で、完全に破壊されました。

きょう一生懸命直していたのは、こういう状態を何とか元に戻したいということなのですが、こういう波が来たならばまた壊れます。それは間違いなく壊れる。じゃあどうしようという話はきょうの議題ではできないのですが、そういうくらい毎年、何遍も来るわけではございません。強い波というのはめったにしか来ない、しかし、来ることは来るわけですね。これはエルニーニョの年だから、7~8年に1回はこういう異常な波が来るわけで、別に脅かしているわけではなくて、こういうものはある。

だから、ある南の、私が行ったモルディブなどではこういう島に波が来るときはみんな島から逃げてしまう。そして、そういう波は滅多に来ないから、その後また普通の生活をするという対応をなさっている島もあります。だけれども、ここはみんな背中にして逃げるといってもいいかわからないので、そこがちょっと辛いところです。

もう2枚。

[Power Point]

さっきのところを反対方向に見ると、さっきの台風の後にはこんな風景になります。これは爆撃を受けた後のように見えますけれども、コンクリート製の構造物ほど弱いものはありません。大体厚み50cmでつくっているのですが、何のことはない、砂上の楼閣、砂の上に建っているものは下の砂がなくなれば重力の作用で下に落ちる。そのときに割れ目がうんとできてしまう、当然の姿ですね。これは実は壊れる前の写真がないので、壊れる前の風景というのは、こういう状態だったのです。これは正確に同じ場所ではないのですが、大体基本的にこんな形でつくっている。これは一見強そうに見えて、金槌を持っていったらたたいてみても手が跳ね返るぐらいしっかりしたものにできています。だけれども、これの下側の裏からサクッとこうやると、非常に簡単に落ちます。そういうものなのです。

それを、では何でつくったのという話があるのですが、それはこの前浜が十分に広いときにはこれは砂がかぶっていますけれども、この程度でもう十分波が消えてくる。しかし、これがどんどん、どんどん狭くなると、これは海に向かった巨大な滑り台になってしまって、滑り台なもので、人間がおりやすくなったということは、波もはし上がりやすくなった、逆もしかりという。だからこれは間違っているというものではない、もともとは十分前浜があるところでつくったのでよかったのですが、だんだん、だんだん狭くなってくると、波よいらっしゃいというふうにも理解できる。人がおりやすいということは、今度は逆に波がどうぞいらっしゃいませというふうにもなってしまうわけです。そういうことで困ったなど。波は越えていただいても困るし、このままでは越える構造になっているということが問題なのです。

[Power Point]

最後でしたか、これは……。

- 上田 宇多さん、左の写真ですね。写真自体は94年の5月24日になっているんですね。
- 宇多アドバイザー 97年……。
- 上田 写真の日付と、言っておられるのが違うのですが。
- 宇多アドバイザー これですか、それでは上が間違いです。正確には、ごめんなさい、94年5月、だから何年前ですかね。これに先立つ3年前の写真です。だから、何遍も繰り返されたという理解でよろしいでしょうか。
- 上田 1つなのですからけれども、94年、宇多さんが一番最初に鴨川に見えたときには、ち

ようど護岸を緩傾斜護岸というか、斜めの護岸にする工事をやっていたときだったのですよ。その前は基本的に垂直だったと思うのですけれども、それは 94 年のものは垂直のときの被害なのですかね。

○宇多アドバイザー これは法枠堤といって、緩い勾配のものの残骸ですから、直の壁ではないと思います。直した後かもしれません。それが先ほどの空中写真で変遷をごらんに入れましたけれども、ああいうものとこれとのタイミングを見ていくというのは、ちょっとまだ分析していないもので、それはちょっと残された課題だと思います。

[Power Point]

これは巨漢、ここにいるのですが、あそこに立っているのですが、現場の人を連れていっているのですが、彼が持っているポールというのは 2m で、この赤白が 1つ 20cm です。何でここに立ってくれと言ったかという、この法枠の中が完全に空洞になっているのです。それで、この空洞のこっち側の護岸のところに大穴があいている。連想ゲームです。この砂は蒸発していったのかということです。蒸発ではなくて、下の空洞からこっちへ抜けて、この中がざっくりえぐられて、ちなみにこれの構造物は直後に全滅しました。

[Power Point]

先ほど会場の方が言っておられたけれども、これは大事なことなのですが、きょうは南うねりが入ってきましたので白抜きのように砂は動く。それから、寒くなると東うねりが入ってくるのですが、こっちから来るとこう動く。どなたか会場の方が言っておられたのですが、そういうふうにくック、くック動く。砂は右へ、左へと動く、正確には南北ですかね。それで動いている。動いているのがこの鴨川のビーチの特性で、動きながら、しかもさっきの古い写真によると、この中央部はかなり勾配が緩やかだったということもおわかり願えると思うのです。

それで、さっきお茶のときに会場からちょっと質問を受けたのでお答えします。

ここにある離岸堤は取り払えないのか、もう要らないではないかという指摘がありました。これについては、私は県の土木部の職員ではないので正確にはお答えできないけれども、一般状況としては、こういうことになります。

あの離岸堤というのは、防災のために国の補助を受けてつくりました。確かに今見ると要らないように見える。その場合、こういう説明ができれば除けることが多分できるだろう。それは、今は後ろ側に十分な前浜があるので、ここからどんな波が、さっき言った 8m の波が来てもこの民家、このあたりですね。民家が災害を受ける、災害というのは波が

越えてしまうとか、そういうことはない、科学的に必ずそうであるから要らないのではないかという説明が非常にクリアにできて、そしてそのことで、もし取った後に砂浜が狭くなって波が飛び込んだというときには海岸を管理者、管理者というのはトラブルが起こったときにそれに対する責任が伴いますので、そういうことは大丈夫ですということがきちっと言えれば取ることは技術論上はできます。

その場合にネックになるのは、これは国庫補助を受けているので、有名な法律、昭和 30 年、「補助金等の適正化に関する法律」というのがあって、国の補助でつくったものは、それにかかった経費を財務省、昔で言うと大蔵省に返納しなさいという法律があるのです。その法律に抵触する可能性が 1つある。要らないから捨ててしまおうということはなかなかできにくい。

今はだけれども、それは運用である程度行くので、どういうふうにするかということ、これは昔の旧帝陸軍と同じで、撤退は認めない。だけれども、転進は認める。撤退と転進とは違う。転進というのは、新たなる目的のために別途戦いを進んでいくわけです。だから、例えば、これはやろうと言っているのではなくて、そういうことの可能性は、ここの施設が防災上、本当に大丈夫ですということがかちと説明できて、なおかつそれが要らなくなったというのではだめなのです。それが別な目的にちゃんと使えるというふうにうまく説明、屁理屈と言われるかもしれませんが、そういうことをちゃんときちっと整理をしながらやっていけば、絶対にだめだということではございません。

ということで、先ほど、どなただったか忘れてしまったのだけれども、会場からちょっと御質問を受けたので、今の場をかりてお答えしました。

5. 意見交換

○宇多アドバイザー きょうは私どもの独演会ではないので、先ほど来もうお話を伺っていませんけれども、きょうの一連のものについて、鴨川の海をどう思うかとかいろいろ思うので、腹の中にたまっていることが随分多いと思うので、これから時間の許す限り、少なくとも 35 分間はありますので、どうぞ何なりと御質問をしていただければありがたいです。

○中里 動かす場合には、技術的には可能なのですか。それから、コスト的にはめちゃくちゃにお金がかかるのか、それともまあ現実的な金目でできるのか、そこら辺、ちょ

っと教えていただきたいと思います。

○宇多アバイザー 技術的には可能です。それは沖の方から、ちょっと電気を落として見ていただいた方がいいですね。

[Power Point]

船で来まして、クレーンを持った船で台船を引っ張ってきまして、そこで取ってそれに乗せて帰って行ってしまうということで、技術論上は問題なくできます。今、国土交通省、私が昔所属していた機関では、こういう離岸堤がみつともないから何とかしてちょうだい、もっときれいな水平線の見える海にしようということを具体的にやるには、離岸堤を取らなければならないですね。そういう工事を全国9箇所始めたという情報があります。だから、望みなきにあらずというか、それはいろいろ正確な整理が必要ですが、そういうことをやっているところもあります。

それから、それに関わる経費については、これは問題ですね。ポケットマネーというわけにはいかない。それから、国庫補助が入っているので、その処置のやり方についてきちんとした整理をする。県の、千葉県は失礼ながらお財布は空っぽに限りなく近いので、自分たちがやるからいいよというふうにはなかなかいかないので、その辺の条件をきちっと整理すれば、今の御質問に対して、ある程度は、それはいろいろやる方法がありますねというお答えになると思います。

それから、私ばかりではなくて清野先生もおられるので、どちらか、あるいは両方というふうに言ってもらえませんか、回答を望む方を。

○上田 サーフライダーファウンデーションという団体の上田といいます。

先ほどの撤去に関する法律の部分で、ことしの3月かな、環境省が旗を振って自然再生法という法律ができて、その説明会に参加したのですが、だから、それは自然再生法という概念の中で新たなお金を持ってきて取るということがお金がかかるならば、それはその枠の中で予算配分をするというふうな説明をされていて、あと財務省の関係での補助金の返納とかに関しても、法律の根本的な精神を推進するためには、そういう金銭的な部分も調整をするということはおっしゃっていました。けれども、まだ実際の法律を海岸で運用したという話は余り聞いたことがないし、よくわからないのですけれども、だから、そういう新しい法律とかを使えばそういう不可能な部分というも可能になるのではないかというふうには思いました。

それに対して、そういうふうな考え方はどうなのかということで、お2人に。

○宇多アバイザー それは流れとしてはそのとおりで、自然再生法案というのは、とにかく法案として衆議院を通過していますから、それはそういうものとして行く。ただし、財務省の担当官は必ずしも、「わかった、全部どうぞ」というふうには多分言わないはずですね。ものすごく大赤字ですから、やはり全部というよりも、幾つかの代表的なものについて非常に困難であるけれども、そういう期待が大きいところから具体の形でやっていこうよというコンセンサスの方が多分できやすいと思うのです。私は法案の詳しいことはわからないけれども。

それからもう一つ大事なことは、法律というのは、後にできた法律と前にできた法律では、前にできた方が優先度が高いのです。それでやっていたものをどんでん返し、法律用語では遡及して、要するに例えば、こういうことは犯罪だぞときょう決められますね。1週間前に遡ってそいつを逮捕しに行くということではできないはずなので、遡及ということができにくいわけです。だから、それぞれの法律でやってきた事柄と新しくできた法律とのバランスというのをちゃんと考えながらやればいいわけなのだけれども、そこにもっと知恵を使って、それから具体例を出していかないと、すぐやるというわけには多分いかない。だけれども、前途は今おっしゃったような方向に何とかやろうという法律がすでに明文化されたという状況に私は認識しています。

○清野アバイザー 自然再生法というのが国会で審議されたときに、私もお手伝いしていた海岸の事例をその証言者というか、そういった自然のこととか環境のことをやっていらっしゃる方が国会の中で説明して下さって議論がありました。今、どういうふうになっているかという、自然再生推進協議会という、きょうは浜づくり会議ですが、そういった形で、海岸だとか川だとか森とか、その場所に対して利害関係のある方の了解を必ずとるということで、そういう方が必ず参加した会議をつくるのがもう要求されるのですね。だから、その中で、特に農林水産業だとか、その自然を使って作業されている方とか、その地面を持っている方とかとのきちんとした話し合いがあって、その協議会というのがこういう方針で行きたいというビジョンを出して、それをもとに各それぞれ管理者でいろいろ細々あるのですけれども、その人たちの行政の間での調整を図るというような、そういう流れになっています。

だから、今までみたいに縦割りですべてやるというよりも、自然再生法の特徴というのは、地域が自分できちんと立案をしていくということと、行政が合意を、こうしてね、こうしてね、とか言っていた時代と違って、地域がある目標があって、例えば鴨川の海だ

ったらこうしたいというような調査とビジョンと、それから、うちは協議をきちんと自分たちでやりましたよという担保があって、それでやり直していくということになります。

だから、かなり今までの海をいじってくる法律とは、地域が主体ということとか、合意が前提ということで、特色があるというか、そういったものが準備できたところからしかできないし、逆に言えばそういうところが、今までは自然の管理を外任せにしていたのだけれども、地元でこうしていきますというビジョンの方を大事にされているので、かなりまだ試験的な状況ですけども、私は可能性はゼロではないと思います。

だから、それが別に自然再生推進法という意味ではなくても、今回の海岸の会議というのは、海岸という従来の範囲の中でそういった世の中的に新しい法律ができた流れを酌み取っているということだし、また自然再生法の協議の中に和田町の白渚の例だとか、そういうのも含めているいろいろな、どういうふう地域の方の意思を酌み取ればいいのかというのが議論されているのですね。

だから、きょう私がさっき、過去がどうだったかという話をしたのも、過去はこうで、だからこういうふう再生したいというのは、再生というのは過去に戻していくということもあるので、そこがやはり1つキーになるということです。

○足名 サーフインクラブの足名と申します。

今、航空写真で海岸ではなくて、白く見えているところは砂がたまっているところですよ。らしいのですね。

○宇多ア'D'バ'イザ- このことですか。

○わらしな はい。

○宇多ア'D'バ'イザ- そうです。おっしゃるとおりです。

もっと真ん中に出せばいい。後ろの方は見えにくいから。

○足名 こういうのは砂がたまっているところですね。

○宇多ア'D'バ'イザ- これはそうではないです。フワッと舞い上がっている、濁った水が舞い上がっているところですよ。

○足名 砂があるように見えるのですが……。

○宇多ア'D'バ'イザ- 浜辺の砂はこれです。これは何と申しますかね、砕波してフワッと舞い上がっている、そういう場所です。

○足名 でも、何となく砂があるところですね。ついているところという解釈で。

○宇多ア'D'バ'イザ- はい、海の底に行くと砂はあります。

○足名 そうすると、これを見るとすごくよくわかるのですが、こちら側には随分白くなっていて、砂がたまっているように思うのです。それで、ちょうどこれはこちらからのうねりがあって、潮の流れでこういうラインができていていると思うのですね。ほかの航空写真にはなかったと思うのです、このラインは。だから、こっちからのうねりというか、潮の流れは素直にこう行くのです。そうすると、南からのうねりですか、それはやはりこの辺の、必要なものなのですが、構造物でもうとめられてしまって、ここに堆積しやすくなってしまっている状態だと思うのですね。

○宇多ア'D'バ'イザ- だけれども、それをもう少し正確に言うと、このとき、ちょっと見ていただきたいのですが、こっちに白波が立っていますね。前原は何も白波はないです。ということは、このときはきょうと同じように南うねり、こっち側から波が入ってきて、ここに見えているのは離岸流です。砕波帯を貫いて、サーファーの方はパーッと乗ってきますね。あれが今出ている。

○足名 離岸流。

○宇多ア'D'バ'イザ- 離岸流。だから、今おっしゃるところで正しいのは、正確なのはそのとおり、こっちへ動いたり、こっちへ動いたりして、こっちの方には今までないぐらい砂がたまっているという状況はおっしゃるとおりです。

○足名 そうですよ。

○宇多ア'D'バ'イザ- そういう理解でいいです。

○足名 それで、私も去年から、こういう話があったのでいろいろ写真を撮っているのですが、ここにリーフ、岩場がありますね。

○宇多ア'D'バ'イザ- 出していますね。

○足名 それが海草のついていない岩がずっと出っぱなしになってしまっているのですね。それでこども砂がなくなってしまっているのですけれども、こちら側も随分砂が減っていると思うのです。それはやはり潮の流れというか、うねりが、こっちは生きていたのですが、こっちはとまってしまっている状態で、全部こっちへたまってきてしまう。あとこういう構造物ですね。構造物があるから動きづらくなってしまっている。ここの待崎川の上流にダムがありますので、この川の水が出なくなってしまっているの、この辺にたまってしまっているという状況だと認識しているのですけれども。

○宇多ア'D'バ'イザ- その認識のとおりなので、ワカメも何もついていないものが、ここに岩が出てしまっていますね。あれは砂で洗われるものは海草がつかないので、つけ根のそこ

ろはもともと砂か、砂の中にぼつねんと岩があったあたりがどンドンと出てきていますね。それはやはりこの辺、さっきの訂正をしますと、ここは全然動かないということではなくて、ここも少しずつ減っているのです。そのバランスが南側に今砂が寄ってしまっているということだと思います。

○足名 そうですね。そうすると、もちろん今工事をやっているここの延長工事なのですが、そういう状況になっている中で、構造物を、もちろんここの漁師さんたちの安全のためだと思うのですが、延長していくということは、余計砂を動かさなくなってしまう状況をつくってしまうように思うのですけれども。

○宇多アトバヱー それは御意見としては理解できる。今、これはけしからぬとか、そうだとかいうことを言うのはちょっと早くて、なぜかという、もう砂は動いてしまったのだけれども、もう動かない打ち止め状態なのか、新しく延ばしたらもっと動くのか、あるいは動くとする、動かないような形にすることは可能かとかいうのを、船の操船上のトラブルもわかった上で1個ずつ丁寧にやって、皆さんの前にこれはこう、これはこうというふうなものを次回以降出していきますので、そういうことにお答えになりますか。要するに、今、そうですとか、そういうふうにする材料を持ち合わせていないので。

○足名 わかりました。とにかく、こちら側に砂がたまってしまおうというのは、いろいろな構造物と、私はダムがあるので砂が動かなくなってしまうという認識をしているので、その辺は間違いないですね。

○宇多アトバヱー この加茂川の上流にダムはあるのですか、私はわからない。

○足名 この上流にダムがあるので、これはダムができる前は、ここはすごく、大雨が降るとすごい勢いで、河口の砂などはなくなってしまうぐらい出たのです、すごく怖いぐらいに。

○宇多アトバヱー ごめんなさい。今度来たときに、私、待崎川の上流のダムというところを見に来ますので、それはちゃんと見てからでないと、土砂の話は正確ではないですね。

○関谷 一番上のテトラポッド、沖の。それですね。それがどンドン、一番延びているのです。それに南うねりが当たって、望洋荘からグラウンドのあたりに直に、ダイレクトにうねりが方向を変えて行ってしまっていると思うのですね。

○宇多アトバヱー 望洋荘からグラウンドの……。棒を斜めに差しいただくと、こういう意味ですか。

○関谷 こっちからうねりが入ってくるわけですよ、右から。右の一番角ですね、その写

真の。それがテトラに当たって向きを変えるわけです。

○宇多アトバヱー こうグッと回ってくるわけですね。ここでやってもらって……。

○会場 もっと詳しく説明しましょうか。(笑声)

○関谷 南うねりがこう入ってくるのですね。それでこれにガーンと当たってこう来るのです、わかりますか。こう来て、こう来るのです。これがないところはこう巻き込んできていたわけですから、こっこの流れもできて、こっこの流れもできて、ここが一番深くて、それで急に浅瀬にでかい波が割れるから、すごい水の量がドンと、よく言う、ハワイとかももろ、そうなのですね。でも、みんなビーチフロントに住んでいますし、そこはもうかなりの高額で取引されていますし、それはやはり自然を求めている人というか、癒しもあるだろうし、水の音とかアルファ波も出るとかいろいろありますけれども、一番の原因は、私はこのテトラを長くしたことが結構ネックなのではないかなと思うのですね。

○宇多アトバヱー その辺はちゃんと計算をした結果をまた……。

○関谷 計算はできないですから、100%のことはできないですから。

○宇多アトバヱー それはそうですね。だけれども……。

○関谷 いかにも自然を、人を中心にして考えてはだめですよ、住んでいる人を。

○宇多アトバヱー おっしゃることはよくわかります。

○関谷 自然を前提に考えてあげないと、だって、もうかなりの歴史がないと、人ではここまでつくれないでしょう。

○宇多アトバヱー つくれないうねですね。

○関谷 だって、こういう大きな海の流れとか。漁師さんだってそうでしょう。流れとかが変われば、入ってこない生物も出てくるだろうし……。

○宇多アトバヱー さっきの話ですね。

○関谷 ええ、また貝とか育ちが悪くなったり、あると思うのですね。水がはげないから、夏になると、海水浴場はもうごみだらけなのです、台風で。

○宇多アトバヱー だから、そういう意味では、別に海岸保全工事の説明会をやるつもりは毛頭なくて、今おっしゃったいろいろな視点からの話を順番にやはり整理していきたいのですね。

○清野アトバヱー 今みたいなお話は結構大事で、計算とか検討とかというのはもちろんあるのですけれども、どこをどういうふうにするときにとか、今、ダムの視点もありましたけれども、いつぐらいにどの辺がどうなったというのを、きょうはちょっとシートを

用意していないのですけれども、それを具体的に……。

○関谷 どの辺がどうなったというのは……。

○清野アドバザ- いや、矢印とかで、今ずっと話してくれたことを、帰りにシートをお渡ししますので、記入していってくると……。

○宇多アドバザ- ボンチ絵でもいいのですよ。ここが波がなくなったとか……。

○清野アドバザ- そうですね。よどんでいるとか、あと季節……。

○宇多アドバザ- こう回ってとか言っていたでしょう。こう回ったというのは、記録に取れないので。

○足名 だから、ちょうど今この辺まで白くこうなっていますね。だから、この辺まで守られてしまっているという状態だと思うのです、うねりはこう来るのですけれども。

○宇多アドバザ- ぜひその辺、おっしゃっている意味はよくわかるので、できるだけ広く皆さんにフィードバックしたいので……。

○関谷 やはり、こういう湾の中心は必ず深いですから。

○宇多アドバザ- それは大事な点ですね。

○関谷 重い砂、石がたまるのです。

○宇多アドバザ- 鋭いですね。

○関谷 軽い石とかは全部一たん出て、また戻ってきてという、その繰り返しだと思うのです。

○宇多アドバザ- それはそうなるな。ありがとうございます。

○清野アドバザ- あと、できたら、どっちからうねりが入ってくるときとか、そういうのもちょっと後で書き分けていただいて、本当にそれはすごく重要な情報なのと……。

○宇多アドバザ- それで、その季節感も言ってもらえますか、こっちのうねりはいつとか。

○関谷 低気圧のコースによって違いますので。

○宇多アドバザ- そうか。

○清野アドバザ- そういううねりの入り方とか、高さとか、実は、多分そういう計算とかも一般的海岸の手法でやるのですけれども、それはもう何段階やってもきりがなくて、それは、やはり地元の人に聞いて書いてもらうというのが正確なので、あと、できたらやはり水のよどみの話とか、多分においだとか、足下がヌルヌルするようになったとか、その辺の感覚とかも……。

○関谷 かわいそうですね、海水浴場に来て、あんなごみだらけの中で海の家を建てて

……。

○宇多アドバザ- そうか。

○関谷 5歩ぐらい行ったら海ですからね。

○宇多アドバザ- ここはまだいいですよ。だから、ここは本当に貴重な……。ひどいと言えども、もっとすさまじくて、何だこれというところばかりになってしまったのだから。

○関谷 それ、どこですか。

○宇多アドバザ- じゃあ、九十九里でもいいですが。

○関谷 九十九里は、でももともと質がこことは比べものにならないぐらいだから。(笑声)

○宇多アドバザ- まあね。だから、もう一回元に戻ることが本当に難しい、一たん壊してしまうとね。

○関谷 それは無理ですね。

○宇多アドバザ- そういう海岸なのだといいことで見ていきたいですね。

○関谷 マリーナをつくったときも、ここの磯は殺してしまっているわけですね。完全に取り除いてしまっているわけですからね、この磯。

○宇多アドバザ- 埋めてしまったのか。

○関谷 埋めてしまったのですか。

○宇多アドバザ- いやいや、それは知らない、調べてみないとわからないですけれども。どうもありがとう。ぜひ、情報提供をお願いします。

ほかにまた違った側面でも構いませんし、どうぞ。

○清野アドバザ- どういう魚がどこにいたとかいなくなったとかというお話もすごく重要なので……。

○宇多アドバザ- 伊勢エビが捕れたのが捕れなくなったとか、そういう話でもありがたいのですけれども、とにかく、陸の話でも構いません。何か、いかがでしょうか。

○関谷 アユは戻ってきましたけれどもね。

○宇多アドバザ- それはすごく重要な話だ、アユはどこに……。

○関谷 天津の二夕間川と、それこそ……。

○宇多アドバザ- 待崎川と……。

○関谷 待崎川には戻っていますね。

○宇多アトバイザ - それは大事な情報だね。パワーポイントを出してもらって。

[Power Point]

これでいいです。今のお話で、ここに済みませんが、アユの情報というのは非常に重要なので、これでちょっと。

○関谷 ここは、数は少ないですけども。

○宇多アトバイザ - 待崎川。

○関谷 はい、今、投網やっている人もいますし、それから二日間、ここですね。

○宇多アトバイザ - ああ、こっち側の。

○関谷 二日間海岸。

○宇多アトバイザ - 昔いなくなった、一たんだめになったのだけれども、また戻るようになったのですか。

○関谷 そうです。そこは今、友釣りもやっていますし……。

○宇多アトバイザ - 加茂川はどのようなのですか。

○関谷 加茂川はだめですね。

○宇多アトバイザ - どうしてだめという……。

○関谷 わからないですね、工事をし過ぎたのですかね、護岸工事。

○宇多アトバイザ - そうなのですか。

○清野アトバイザ - アユの話はすごく大事で、御存じだと思いますけれども、アユの子供というのは本当に波打ち際のところで育つので、海の魚でもあるので、海岸工事をしてしまうとアユを結構つぶしているのですね。川で、魚道でアユを通してやろうというよりも、海でアユというのは余り大事にされていないので、アユがいついなくなったとか、上るようになったというのもまた、だから、いついなくなってしまったかというも……。

○関谷 その前にハタという魚がいて、黄色と黒と白のストライプの、背びれにとげがあるやつなのですけども、それは河口付近にすごくいたのですけれども……。

○宇多アトバイザ - 今はだめなのですか。

○関谷 もう絶滅していますからね。全然見ないですから。

○宇多アトバイザ - アユの稚魚はサーファーと同じで、白い砕波帯のところに生きているわけですね、(笑声) いや、本当に。

○清野アトバイザ - そうなのですよ。砕波帯のところでアユの稚魚の調査って、というか、サーファー以外の人はそういうところには余りサンプリングに行けなかったのでデータが

なかったのですけれども、それで調査をしたらくさん入ってきたので、実はそこにたくさんいると思います。

○会場 波の生まれているところ。

○清野アトバイザ - そうですね、砕波帯で。だから、稚魚調査というのは、チリメンジャコを捕るような網を、人がワーツと走るのです。そうすると巻かれて、調査中に事故があるので、それで余り……。

○関谷 魚にとって、その辺は酸素が多いから、やはり育つのではないですか。

○清野アトバイザ - そうなのですね。だから、アユもそうですが、サケの稚魚もそういうサーファーがいるラインに大体いるのですけれどもね。

○宇多アトバイザ - ありがとうございます。

まだいろいろお話、質問をなさりたい方がおられると思うのですけれども、いかがでしょう。何でもまずけ言っていただければ。

○清野アトバイザ - あと、刺し網とかというのは、この中でどの辺に入れているとかというのはありますか。刺し網は結構岸近いところが大事だと思うので、その辺はどうですか。また改めて教えていただいてもいいのですけれども。

○清水 済みません、東京から来ている清水と申します。

このままにしていたら、この海は何年ぐらいでどんなふうになるのですか。

○宇多アトバイザ - 鋭い質問ですね。完全にほったらかしという案もありますね。その場合に、ここにシーワールドの社長さんがもしおられたら、大変申しわけないのだけれども、波が飛び込むこともあるだろう。それから、ここのフィッシャリーナでしたっけ、ここのところに波が入ってきてしまうので、ここの船着き場の使い勝手が悪いままになるだろう。それから、ここはもう延ばさないのかな、よくわからないのですけれども、ここのところを行き来する船に対して、この波の反射がかなり出ていますので、それが、事情は聞いていないのでわからないのですけれども、今後、そのままでもいいのかどうかかわからないです。

それから、この辺は変わらないですね。これは全然変わらない。来てしまった砂はさっきおっしゃったとおりで、陰になってしまったので、こうもり傘を差すとその下は雨が降らないという、あるいはねずみ捕り、ウナギを捕るもの、あれはウナギが入ったら出られないですね。ああいうことが今起こっているのです。離岸堤とこの背後は、入ってしまった砂は二度と出ていきません。

今後起こるのは、風が吹くたびに細かい砂が集中的にここに集まっていますから、私が

泊まったホテルがこれですけれども、あの前面あたりは細かい砂が風のたびに吹いてくるようになるであろう。まあ、箒で掃除をして元に戻せばいいのかもしれませんが、こちら側は砂が多いからほっておいてもいいのですが、このあたりがやはりちょっとね。きょう護岸工事をしていましたが、あれは私の見るところ、こう言うてはなんですけれども、3年以内にまたガツンとって壊れる可能性が高いです。じゃあ、今のことは意味がないということではなくて、何とかしないと、遊歩道、歩くところがないですから、万やむなしとかね。だから、そういう意味であそこをもう少し、何だ、3年置きに壊れるようなものやっつけていいのかという議論は別途あるかもしれませんが、それは今後また議論をすればいい。だから、いろいろな、そのままにしておけばいいじゃないかということも含めて、広く議論をしたらどうかと思うのですが。

まだ御質問はございますか。

どうぞ。

○鈴木 横須賀の方から来ております鈴木と申します。

私の地元でもちょっと似たような問題が起きていまして、今回、こういったほかの地域のことにごく興味があって、ちょっと参加してみました。

うちの方の進め方と比べてしまうと、行政とか地域住民とか、専門家の方々が一体になってすごくいい方法で話し合っているという姿勢がすごく感じられて、本当にうらやましく思いました。

ただ、時間をかけて、腰を据えてやっていこうという姿勢なのだと思うのですが、でもそうはいっても、実際にそうやって被災という状況はあるわけで、実際に逆にこれは行政の方にお伺いしたいのですが、これはどのぐらい時間をかけて、今後どういったプロセスでやっていくのかとか、その間、そういった実際の被災に対する早急の対処はどうしていくのかとか、ちょっと理想論ではない、現実的なことを多少お伺いできればと思いますが。

○宇多アドバイザー きょうは行政の方は来ていないのですよ。みんな一般市民として座っている。そうしないとこうなってしまうので、質問は私が受けて、間違っている可能性がなささかあるかもしれませんが、おおよそそういう方向で行きたい。

今回は、まず最初にごらんいただいて、いろいろな質問を受けていますね。それをもう少し具体的な形で、これはこうという、あるいはヒアリングしてこれはこうでしたというのをもう少し正確に詰めて、もう一度皆さんに御披露したい。それがこし中にもう一回、必ずやります。日曜日から土曜日の、皆さんが休みの日に必ず来ますので、それでやる。そ

の段階で、今のお話で、何もしないでもいいではないかとか、あるいは海で工事をするのだけはやめてくれとか、陸で勝負できないかとか、いろいろな議論がありますね。そういうものを皆さんの御意見を伺いながら、私だからこれにすべきということは口が裂けても言いませんので、私も持ち合わせていないから。それで、議論を煮詰めながらやっていく。

それで、願わくば来年ぐらいに、とりあえず一番被害を被ってしまうのがこの辺の方々なのですね。この辺の方々はいずれ波が来れば、シーワールドのところは、人は死なないかもしれませんが、すごい被害が出るわけです。それを議論しているからいいではないかというふうにやるのは、ちょっとかわいそう過ぎるという面もありますので、だけれども、ここのところに離岸堤 100 基つくりましようとか言い出すと、せっかくの鴨川が海がだめになってしまう。それはもう自明だと思うのです。そここのところでいろいろな案を詰めながら、来年、できるだけ早い段階に、とりあえず、今苦しんでいるこの辺の方々の苦しみを除くような方法ができればなど。それには、だから大手術をしてしまうとかいうことは余り言いたくないですね。やれば、やるとまたその手当てでと、ドミノにはまってしまうことが多いものですから、そういうことは今すぐどうだ、こうだという話はないけれども、そういうところで、すべてコンセンサスのもとでそういうことが得られれば、そういうところからまず救いの手があるのだったら、そういうのをやればいいし、この会は土木工事の説明会ではございませんし、土木工事の工法検討会ではないのです。この周りの海、さっき、冒頭に清野さんがお話をしたように、陸の方も含んだ全域の、この区域全体の将来の、20年、50年先の姿にかなり影響するようなことを議論しようということですから、決してハードなトンカチの話をやってパチパチということにはならないように、随時いろいろなことをやりながら、冒頭の市長さんのお話の、いろいろな方が住んでおられてこの地域の発展があるのだということは、私たち事務局は重々わかっていますので、そういう中で意見をまとめていったらどうかということで、タイムリミットがいつあるとか、ないのですが、コンセンサスですから、来年ぐらいに何かできたらいいなという個人的希望は持っています。皆さんによります。

○清野アドバイザー 私は事務局ではないので申し上げますと、一般的には、きょう見ていただいたのは災害復旧ということで、原形に戻すということでやっていて、それは原形にはまず戻すのだと思うのですね。そこから先は、今までだと一応行政の方で、災害を受けているかなりヤバイ場所だから、そこをそういったもっともっと対策をするというのでバタバタ決めてやっていたのだと思います。ただ、今回、こういう会議を開いたときに、基本

的にこれの対策をやるときに、さっき税金の話があって、30年間は大体この景色のままよとか、こういう構造物のままよ、みたいなことで、次に意思決定をされる際には、ここにいる人が目の黒いうちは大体こういうままだという覚悟ぐらいはあることじゃないと、また何かということには多分ならないのだと思うのです。

もっともっと千葉県も国もお金がなくなってしまうから、50年になってしまうかもしれないし、ほかも大変とかやっているんで、そうすると、そのときバタバタ決めてしまうと、多分、あぁしまったということも今まで多かったから、皆さんがもう少し考えて、幾つか考えられるものを、できたらやはり皆さんはずっと地元に住んでいて、いろいろなアイデアというのは多分あると思うのです。その中からある程度の案が見えてきて、それが技術的にどうかという、案を幾つか出す段階も、望ましいのは、鴨川に住んでいる人から出てくることだと私は思います。今の事務局体制のままだと、またこのチームで幾つか案がありましてとか言って、また次回持ってきてどうでしょうなどということになるのだと思うのです。そのときに、できたら、やはり力のある地域はアイデアでもいいから出していただくと、それがよりこういう技術的な話とか、未来を考えるとときのもっと中身に入っていくのだと思うのです。

私は三番瀬の会議でずっと海岸のこととかやって本当に痛感したのは、やはり皆さんの中から案が出てくるということがまず大事なのと、それから、その案が出てくるのだけでも、物理的にできないとか、この海だと無理だということもあって、それは技術の方とか制度の方から、それもフランクに言わせてもらうということなのだと思うのです。

きょうの1回目は現況説明ということで、割と大枠のところでお話をしたのですけれども、次回も含めて、もっと地元からこの会の運営で、例えば地元からもっとこういう事務局側に入りたい、例えば運営はもう地元で何人かの有志でやりたいとか、そういうアイデアがあったら、またそれもそれでどういう形になるかということも含めて検討できると思います。だから、きょう皆さん、「へえ」と言って帰ってしまうと、運営も多分このままなので、といて今急にどうしたいということもすぐには思い浮かばないかもしれないので、2回目ぐらいまでに、この海岸をやはりどうしたいのかということを見える形で、それは意見だけではなくて、こういう会議の運営とか、案の出し方とかも含めて、御意見をいただけたらすごく踏み込めると思います。

だから、海のことを考えても、最後の大事なところを他人任せにしてしまうか、もっと踏み込めるかの差というのがこの1回目と次回の2回目ぐらいまでの間に皆さんに考えて

いただけたところかなと思います。

○宇多アバザー さっき、「年内」と私、間違っ言ってしまったのです。訂正します。「年度内に」です。ですから、皆さん忙しいから、3月という手はないですね。1月から2月のX日でしょう。寒いときの、北東のうねりが来ているときにやはりもう一度やる。

それから、今の清野さんのお話のとおりでありまして、技術屋は得てして、「そういうことを言うのは、おまえがわかっていない、おまえは勉強していないだろう」、そういうことを言うのが技術屋ないしは専門家の特性なのです。私はそういうことはやりたくない。言おうと、アイデアは、技術論上、大したことのないアイデアもどうぞ出してください。それをサポートしますから。それをどうやったら技術的にうまくいくのか、あるいは法律的にうまくいくのかというアイデアを練る能力は抜群に持っていると思いますから、皆さんの、こういうことを言ったら何か変じゃないのという、そのバリアを取り除いてもらおうと、ここからうまい話が全国に広がる可能性が多々あると思いますので、仕組み論、あらゆるところがありますので、どうぞ言っていただければお答えします。

それから、一切のことは一切秘密をつくりませんので、きょう持ち帰った資料はどなたにでも配っていただいて、どうぞ、ちり紙交換に出しても構いませんが、そういうふうに関後ともあらゆる機会を通じて、ごっそり密室でやるということは一切いたしませんので、ずけずけと行っていただければありがたい。

それで、この時間が一応4時半ということですので、皆さん、日曜日はお忙しいので、そろそろこれにて終わりたいと思います。次回については、鴨川市、市長さんほか大変汗をかいていただいているのですが、そこを通じましてまた皆さんの方にお知らせ申し上げますので、その節は、済みませんが、お忙しいところをまた駆けつけていただければありがたいと思います。

それでは、どうもありがとうございました。(拍手)

6. その他

○事務局 それでは、入場いただいた際にお手元にアンケート用紙の方を配らせていただいていると思います。それはきょうバタバタと書いてもらって、置いて帰ってくださいというものではございません。ゆっくり、きょうお話を聞いていただきましたことを考えていただきまして書いていただいて、市の方にお持ちいただければありがたく思います。

並びに、中でもありましたけれども、昔の古い写真とか、資料等がございましたら、御協力の方をよろしくお願いいたします。

それでは、市役所様、あとよろしくお願いいたします。

○司会 皆さん、長時間にわたりまして、大変御苦勞さまでございました。

本日、皆様からいただきました貴重な御意見につきましては、後ほど議事録に整理いたしまして、次回の海岸づくり会議の際にお示しをさせていただきたいと存じております。

なお、次回の海岸づくり会議につきましては、先ほどお話がありましたように、年が明けてからの開催を考えております。詳しい日程につきましては改めて市の広報などで掲載をさせていただきたいと存じております。今回同様、たくさんの方々の御意見をちょうだいしたいと思いますので、よろしくお願いいたしますと存じます。

それでは、閉会に当たりまして、市長にかわりまして、私どもの都市建設課長、石井から御挨拶をさせていただきたいと存じます。

○石井都市建設課長 本日は御多忙の中、多数お集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

第1回目の海岸づくり会議ということで、私ども事務局を務める者として、いろいろな試行錯誤のあったものもありました。何はともあれ、多数の御参加をいただきまして、また有意義にこの会を過ごさせてもらったことを感謝申し上げます。閉会に当たりましての挨拶とさせていただきます。

どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 それでは、本日の会議はすべて終了いたしました。

なお、先ほど来お話のありましたとおり、入場の際にお渡ししてございますアンケート用紙につきましては、お帰りの際に事務局、あるいは後日、私どもの方の都市建設課の方に御提出していただければ幸いです。

本日は大変お疲れ様でした。

7. 閉 会